

2021 年度

自己点検・評価報告書

A decorative graphic consisting of several parallel blue lines of varying lengths, arranged in a diagonal pattern from the bottom left towards the top right of the page.

岩手保健医療大学

Iwate University of Health and Medical Sciences

目 次

I 委員会活動報告

【学部】

● 教学委員会	3
● 入試委員会	7
● 学生委員会	9
● 図書・情報管理委員会	13
● FD 委員会	16
● 実習委員会	20
● 地域貢献・国際交流委員会	25
● 研究委員会	27
● 自己点検評価委員会	29
● 防火防災・環境保全委員会	31
● 研究倫理審査委員会	35
● 国家試験対策支援委員会	37
● カリキュラム検討委員会	40

【大学院】

● 教学委員会	43
● 入試委員会	45
● FD 委員会	47
● 自己点検評価委員会	50

II 教育・研究年報

【学部】

● 一般教養	55
● 基礎看護学	56

● 成人看護学	58
● 老年看護学	61
● 母性看護学	63
● 小児看護学	65
● 精神看護学	66
● 地域看護学	68
● 在宅看護学	69

【大学院】

● 2021 年度大学院科目一覧	71
● 共通科目	72
● 基礎・地域連携看護学	74
● 臨床・応用看護学	75
● 看護管理学	78

Ⅲ 個人ごと業績（著書、論文、学会発表、その他）

【学部】

清水 哲郎	83
相澤 出	83
大井 慈郎	84
長谷川 幹子	84
作間 弘美	84
土田 幸子	84
石井 真紀子	85
添田 咲美	85
佐藤 大介	85
勝野 とわ子	86
木内 千晶	86
齋藤 史枝	87
江守 陽子	87
大谷 良子	87
佐藤 恵	88
濱中 喜代	88
下野 純平	88
遠藤 麻子	89
岡田 実	89
長南 幸恵	89
佐藤 つかさ	89

鈴木 るり子	90
石田 知世	90
大沼 由香	90
加藤 美幸	92
工藤 美由紀	92

【大学院】

伊藤 収	93
------	----

IV 外部資金獲得状況

● 外部資金獲得状況一覧	97
--------------	----

V 社会貢献(学外活動)実績

● 社会貢献(学外活動)実績	103
----------------	-----

I 委員会活動報告

2021年度 教学委員会活動報告

1. 委員会構成

委員長：木内千晶

委員：土田幸子（副委員長）、江守陽子、大沼由香、鈴木るり子、長谷川幹子、
下野純平、長南幸恵、佐藤貢

庶務：伊藤庸子、田中美月

オブザーバー：濱中喜代（学部長）

2. 委員会の開催

委員会は以下の日程で計12回開催した。

4/1、4/6、5/18、6/22、7/20、9/14、10/12、11/9、12/17、1/7、1/11、2/8、3/8

3. 委員会活動目標

- 1) カリキュラムを適正に実行する。
- 2) 学生の学修状況の把握と学修支援体制の整備・充実を図る。
- 3) 学則に則った内規・細則・申し合わせ等の整備を進める。
- 4) 学修環境を整備する。

4. 活動内容と点検評価

- 1) カリキュラムを適正に実行する。

- (1)カリキュラムの適正な運営

カリキュラムは適切に運営できた。

- (2)定期試験等の準備と運営

定期試験等の準備と運営は問題なく実施できた。一部の科目において、例年にならない再々試験を実施したが、再々試験については便覧等にも記載がないことから、教学委員会で承認の上で実施することを取り決めた。

- (3)成績の管理

成績の管理は適切に実行できた。

- (4)令和4年度学年暦、シラバス、時間割の作成

令和4年度シラバス・時間割の作成に関しては、庶務が主に行い、非常勤講師のシラバスについては委員で点検した。シラバスは、次年度よりさらに内容を充実させ、対応 DP、課題（試験やレポート等）に対するフィードバック方法、準備学修に必要な時間及び具体的な学修内容を明確に示した。

- (5)ゲストスピーカーの調整

ゲストスピーカーについては1月末までの申請のほかに、新型コロナウイルス感染症の関連で必要時対応した。今年度は7科目（在宅看護学概論1名、在宅看護技術論2名、看護管理論1名、在宅看護援助論1名、救急看護論1名、総合実習1名、エンドオブライフケア論1名）について、委員会で審査して決定した。

- (6)講師（非常勤講師）会の開催

講師（非常勤講師）会の開催に関しては、コロナ禍の状況から、対面は避け動画による配信に置き換えて実施した。内容は、本学の昨年度卒業生（2021年3月）の就職状況と今年度4年次学生の就職予定先、卒業生（2021年3月）の看護師および保健師国家試験合格状況と国家試験対策、教務関係、2021年度カリキュラムの実践と担当授業科目の運用、新カリキュラムの特徴と構造、旧カリキュラムとの比較とした。

(7) 学士課程教育の質保証

学士課程教育の質保証に関しては、日本看護系大学協議会や日本私立看護系大学協会のリモートの会議や研修会に参加し、日本看護学教育評価機構について、コロナ禍の体験と新たな方式の看護学教育についてなどの情報を得た。またオンデマンドの研修会についても Web 上で視聴に努めた。

(8) 保健師課程の選抜

保健師課程履修学生審査に関しては、筆記試験及び面接試験の結果、希望者 20 名のうち 10 名を選抜した。次年度からの新カリキュラム導入に向け「新カリキュラムに伴う保健師課程履修学生審査に関する申し合わせ」について、出願要件、選考方法等の見直しを行った。

(9) 卒業研究ゼミナールの学生配置

学生配置は、委員に一般教養の教員が存在しないため、一般教養領域長にも参加を願い決定した。

(10) 卒業判定

卒業判定会議を実施し滞りなく判定を行った。

2) 学生の学修状況の把握と学修支援体制の整備・充実を図る。

(1) 新入生及び進級学生オリエンテーションにおける履修指導

新入生及び進級学生オリエンテーションにおいて、学生便覧に沿って教育理念、教育目標、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシー、教育課程、履修について説明した。留年学生については、教学委員の各学年担当者が面談し履修指導を行った。今年度からは学年末に面談を実施し次年度の履修の意思の確認も含めて履修指導を行うよう変更した。

(2) 学生の履修状況の把握と指導

出欠管理は、科目責任者が行い、非常勤講師の科目は庶務が管理を行った。前年度から継続して、新型コロナウイルス感染症予防のため、発熱があれば公欠扱いとした。学生の中には新型コロナウイルス感染症とは関連が無いと思われる発熱による欠席も認められ、講義の大半が公欠扱いとなる事例もあったため、今後その扱いについては課題となる可能性がある。

(3) 初年次教育及び学生支援プログラム等の開催

初年次教育及び学修支援プログラムに関しては、新型コロナウイルス感染症予防のため、フレッシュマン合宿、サマーキャンプは中止とした。ナーシングプレッジセレモニーは、保証人は招待せず、関係者のみの参加のもと 11 月 5 日に挙行了。参加者は学生 79 名、教員 20 名、職員 6 名であった。報道機関 3 社の取材があり新聞、テレビで報道された。参加者へのアンケート結果では、学生はセレモニーの意義を見い

だし満足感を得ていた。教員は「初年次教育および学生支援プログラム」の大学としての位置づけや、セレモニーの内容、準備・運営方法の再考が必要だと感じていた。意義はあったと評価できるが、今後の運営方法、内容については検討が必要である。

次年度は改正される「保健師助産師看護師学校養成所指定規則」に併せ、これまで本学が正課外等で実施してきた様々な支援を体系化し、新たに「キャリア支援教育プログラム（仮称）」を開設する。そこには基礎学力向上のためのeラーニングシステム「すらら」の導入も盛り込み、社会的・職業的に必要な専門的な知識、技能や態度を育てるキャリア教育を実施する予定としている。

(4) 留年・仮進級・成績不振学生への学修支援

今年度は、入学前教育に加え、外部講師により、スタートアップテスト下位学生 20 名を対象に入学後のフォローアップ補講（リメディアル教育）を 90 分×10 回実施した。教学委員の中で1年生から3年生までの学修支援担当を決め、留年学生、仮進級学生の面談や形態機能学（解剖学）の成績不振学生 5 名の補講を実施した。支援した学生の期末試験の結果は振るわなかったため、次年度はeラーニングシステム「すらら」の活用や、新カリキュラムの看護のための「看護の基礎化学」「看護の基礎物理」「看護の基礎数理」「看護の基礎生物」の講義により基礎学力向上をさせ、成績不振による留年生ゼロを目指したい。

(5) 入学前教育の開催

2022 年度推薦入試合格者 33 名に対し、課題レポート作成とフォローアップ講義・レポート添削による入学前教育を実施した。2 月 22 日開催のフォローアップ講義には 31 名が参加した。内容は盛岡大学短期大学部助教によるレポートの書き方とした。事後のアンケートでは「レポートは自分の中でどういう風にかいたら良いのかあまり理解できていなかったが、講義を聞いてコツが分かった」「感想文とレポートの違いをしっかりと理解する事が出来た」「講義に参加して、春からの看護について学ぶ意識や意欲を高めることができた」等の意見があった。レポートは再提出後に添削しアドバイザーからのフィードバックを予定している。次年度は、eラーニングシステム「すらら」の活用も検討し、基礎学力の定着と学習習慣の獲得維持につながる企画・運営を目指したい。

3) 学則に則った内規・細則・申し合わせ等の整備を進める。

(1) 「岩手保健医療大学科目履修の認定及び成績評価に関する規程」の見直し

新カリキュラム導入に向け、新たに「岩手保健医療大学履修登録単位数の上限（CAP 制）に関する実施要項」「新カリキュラムにおける新設の選択科目履修対象者に係る申し合わせ」「岩手保健医療大学 GPA 制度実施要項」を策定し、「岩手保健医療大学履修規則」「科目履修の認定及び成績評価に関する規程」についても見直しを行った。主な追加変更点は仮進級制度の廃止、GPA 制度の導入、CAP 制の提示であった。

4) 学修環境を整備する。

(1) 教室等の管理運営

新型コロナウイルス感染症対策で三密を防ぐため、2つの講義室を1つに連結して

使用した。そのため、講義室不足が生じ管理運営に苦慮した。非常勤講師においてはオンライン講義も併用し、機器等がスムーズに機能するように、庶務が中心となりサポートした。

(2) 学内無線 LAN と講義室の機器等の環境の整備

学内無線 LAN は回線工事を実施したが、未だ Wi-Fi 環境は十分とは言い難い。講義室のパソコンを新調し機能が向上したことで動作はスムーズに改善した。また、Zoom ビジネスプラン 10 アカウントを契約し、IT の活用方法について教員に周知し、公欠の学生にはオンライン授業を受けられる環境を整備した。さらに、新型コロナウイルス感染症予防のためにパーテーションや清掃用具などの備品を整備した。

5. 次年度に向けた課題

- 1) 新カリキュラム・旧カリキュラムの適正な運用
- 2) 時間割・講義室等の適正な運用
- 3) キャリア支援教育プログラム（仮称）の開設
- 4) 学生への学修支援の充実
- 5) 初年次教育及び学修支援プログラムの再検討
- 6) 非常勤講師との講師会の実施
- 7) 成績管理等、学務システムの充実
- 8) 学内 Wi-Fi 環境の整備

以上

2021年度 入試委員会活動報告

1. 委員会構成

委員長：濱中喜代

委員：石井真紀子（副委員長）、清水哲郎、岡田実、勝野とわ子、長谷川幹子、
大谷良子、晴山均、佐藤貢

庶務：平船果凜、畠山佐智子

オブザーバー：兒玉清隆

2. 委員会の開催

委員会は以下の日程で計7回開催した。

4/15、6/10、10/15、12/1、2/9、3/10（メール上での審議）、3/25

さらに追加で入試本部会議を1/28に行った。

3. 委員会活動目標

- 1) 「岩手保健医療大学入学者選抜に関する規定」に基づいて、2022年度入学生に関する入学試験を準備し滞りなく、実施する。
- 2) より多くの受験者の確保に向けて高校訪問、指定校推薦制度や編入生受け入れに関して検討する。
- 3) 本学における大学入学共通テストの導入に向けて情報収集を行い、入学試験実施方針及び選抜方法を検討する。

4. 活動内容と点検評価

- 1) 「岩手保健医療大学入学者選抜に関する規定」に基づいて、2022年度入学生に関する入学試験を準備し滞りなく、実施する。
 - (1) 入試問題作成について
入試問題作成については例年通り円滑に進んだ。
 - (2) 学校推薦型入試の定員枠増について
学校推薦型入試の定員枠増について検討し、35名から38名とし、B日程とC日程の人数をそれぞれ10名から8名、5名から4名に減らした。
 - (3) 受験及び合格者手続き状況について
 - ・学校推薦型入試では志願者が26名、受験者が26名でそのうち26名を合格としたところ全員が手続きした。定員に満たなかったことから、2次試験を行った。志願者7名受験者7名で7名を合格にしたところ全員が手続きした。
 - ・一般入試A日程では、志願者が57名、受験者が56名でそのうち54名を合格としたところ26名が入学手続きを行った。1名から開示請求があった。その後入学手続きを行った者の中から辞退者が9名出た。
 - ・一般入試B日程では、志願者が14名、受験者が10名でそのうち10名を合格としたところ5名が入学手続きを行った。開示請求はなかった。その後入学手続きを行った者の中から辞退者が5名出た。

・一般入試C日程では、志願者が7名、受験者が5名でそのうち5名を合格としたところ4名が入学手続きを行った。開示請求はなかった。その後、入学手続きを行った者の中から辞退者はなかった。

以上の結果から3月31日現在で入学者は54名になった。今年度は岩手県内の受験者が少なく、入学手続き率も大きく下回った。少子化及び新型コロナウイルス感染症の影響等による経済的な影響や広報活動が十分にできなかったこと等の理由も考えられるが今後詳細に分析し、対応を検討する必要がある。

2) より多くの受験者の確保に向けて高校訪問、指定校推薦制度や編入生受け入れに関して検討する。

(1) 高校訪問

高校訪問は新型コロナウイルス感染症の蔓延により高校から受け入れて頂けなかったため、電話対応が主となったが、11～12月にかけて佐藤課長、兒玉顧問とで59校（岩手県38校、秋田県7校、青森県9校、宮城県5校）の高校を訪問した。

(2) 指定校推薦を希望する高校があり、次年度からの指定校推薦制度の実施に向け具体的な検討を行った。

(3) 特待生制度の検討

優秀な学生の入学を確保する方略として、成績上位の生徒に特待生として学納金の減免をする制度等を検討し、次年度から実施する方向とした。

3) 本学における大学入学共通テストの導入に向けて情報収集を行い、入学試験実施方針及び選抜方法を検討する。

大学入学共通テストの導入に向けて情報収集を行っているが、実施に対する積極的な意見よりも消極的な意見が多く、具体的な入学試験実施方針及び選抜方法を検討には至らなかった。

5. 次年度に向けた課題

- 1) 岩手県の受験者数の激減についての分析及び対策の検討
- 2) 魅力ある大学としての広報活動の充実（高校訪問、オープンキャンパス等）
- 3) 指定校推薦入試の検討および実施
- 4) 入試体制の見直し
- 5) 特待生制度等の実施
- 6) 大学入試共通テストの導入に向けての情報収集と検討

以上

2021年度 学生委員会活動報告

1. 委員会構成

委員長：岡田実

委員：長谷川幹子（副委員長）、土田幸子、石井真紀子、長南幸恵、相澤出、
作間弘美、佐藤貢

庶務：伊藤庸子、平船果凛

オブザーバー：濱中喜代（学部長）

2. 委員会の開催

委員会は8月を休会として、以下の日程で計11回開催した。

4/13、5/17、6/8、7/6、9/6、10/18、11/8、12/3、1/14、2/9、3/9

3. 委員会活動目標

1) 入学時・進級時オリエンテーションの企画と実施を行う。

2) 学生にかかわる支援を行う。

(1) 学生の処遇（退学・休学・停学・除籍）について教授会に審議の提案

(2) 奨学金制度への対応

(3) アドバイザー制・学年担任制による学生個々の面談と指導

(4) 健康診断の企画と実施およびルーム1の整備と管理

(5) 学生の表情に関する検討

3) 学生生活にかかわる支援を行う。

(1) 特に長期休暇（春・夏・冬）前の注意喚起

(2) 学生生活アンケートの実施（全学生を対象に2年毎）と支援策の検討

4) 学生自治会活動を支援する。

(1) 自治会の運営（次々回総会の開催、会計事務など）の支援

(2) 鶴鶴祭の企画・実施への支援

[付記：2020年度の年間目標に挙げられていた「懲戒に関する取り決めの検討と策定」は既に2020年度に策定済みであるため、活動目標から除外された。また「キャリアガイダンスの計画と実施」および「就職支援体制の充実」が学生キャリア支援室の所掌に移行したため、2021年度の学生委員会活動から除外されている。]

4. 活動内容と点検評価

A：学生ファイルの管理と保管について

前任の学生委員長より、学生個々に関するファイル全学年分を引き継いだ。ファイルは段ボール箱に収納するという管理方法を見直し、事務室内の秘密保持のできる然るべき場所に学年別にファイリングすることとした。このファイルへのアクセス権は学部長、学生委員長及び副委員長、事務局担当者とした。経済、身体、メンタルに問題を抱え学修生活に課題のある学生は別ファイルに収め、アクセスしやすい様に保管した。

また、学生アドバイザーやキャリアアドバイザーから降ろされてくる学生記録について

は、学生委員長がその都度預かり、ファイル保管場所に学生別に収納することとした。今年度から学生個々のファイルを以上のように保管・運用しているところだが、現在までの所、特に問題となるような事情は生じていない。

B：学生支援プログラムの担当委員会について（学長依頼）

2021年12月2日付で学長より、開学以来継続してきた「フレッシュマン合宿」、「ナーシングプレッジセレモニー」、「サマーキャンプ」の3つの学生支援プログラムについて、これまで教学委員会が担当してきたが、支援活動として手に余る状態にあるため、学生委員会で担当できるプログラムについて検討して欲しいとの依頼があった。

学生委員全員から意向調査を行った結果、「フレッシュマン合宿」は新入生を歓迎する活動として半日程度のプログラムに圧縮し、適宜、学生自治会の参加協力を得ること、「サマーキャンプ」は完成年度を迎えた現在、実施するスケジュールが取れない、教員の参加が得られにくいことが考えられるため、役割を終えたプログラムとして廃止すること、「ナーシングプレッジセレモニー」は保護者の参加を得て、その前で看護者として決意を表明することになるため、開催にはある程度の意味があるが、保護者の参加がなければ厳粛さに欠けたセレモニーになりかねない。学生委員会が担当するプログラムとしては考えにくいので、開催方法を見直して全教員が参加するセレモニーとしてリニューアルする必要がある、などの内容を文書で回答した。

1) 入学時・進級時オリエンテーションの企画と実施を行う

新入生オリエンテーションにおいては、教学委員会および図書・情報管理委員会の協力を得ながら、学生委員会では「学生生活全般」、「健康管理全般」および今年度から新たに規定された「懲戒処分の標準例」を引用しながら、健全な学生生活について説明した。

2) 学生にかかわる支援を行う

(1) 学生の処遇（退学・休学・停学・除籍）について教授会に審議の提案

・「休学」、「休学からの復帰」および「退学」となった学生と面接（場合によっては保護者同席で面接することもある）を通じて事情を聴取し、やむなく「休学」や「退学」に至った学生については、その事情の概略を説明のうえ教授会での審議を経て処遇を決定した。

・今年度の「休学」は12件、「退学」は4件であった。

(2) 奨学金制度への対応

・日本学生支援機構による奨学金および岩手県看護職員修学資金について、情報提供を行い必要な書類作成の支援を行った。

・日本学生支援機構の奨学金の利用者は、給付型奨学金51名、第1種99名、第2種111名であった。（延人数）

・岩手県看護職員修学資金の申請者は11名、うち貸付決定が9名、貸付不承認が2名であり、利用者は41名となった。

(3) アドバイザー制・学年担任制による学生個々の面談と指導

・1・2年生のアドバイザーおよび3・4年生のキャリアアドバイザーによる面接を年1

回～2 回実施し、学生生活の経済面、生活面、メンタル面からの支援を行った。身体面において問題を抱える学生が多くみられるようになった。3・4年生のキャリアアドバイザーは、随時学生からの申し出に対応しており、進路に関する相談や面接指導などを行った。

- ・問題を抱える学生については、委員会の席上、学年担任から報告してもらい、家族・友人間でこじれて複雑化している事例については、現状を共有する共に解決策の検討や家族対応のタイミングを検討し、家族との面接も行った。

- ・今年度の学生相談（カウンセリング）の利用者延人数は4名であった。

(4) 健康診断の企画と実施およびルーム1の整備と管理

- ・入学時の健康診断について新入生に対して要領を説明し、滞りなく実施した。

- ・2021年度のルーム1の利用者は延28名であった。

- ・ルーム1の使用理由は、頻度の高い順にめまい、吐き気・嘔吐、倦怠感、頭痛で、休養後授業に復帰したり、医療機関を受診する事例もあった。なお、救急車による搬送事例は0名であった。

(5) 学生の表彰に関する検討

- ・新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、学生の自主的な活動に制限があったため、今年度は「学部長賞」は「県政懇談会」に参加した学生6名、国家試験対策学生委員として活動した学生11名がそれぞれ表彰を受けることとなった。（3名重複）

3) 学生生活にかかわる支援を行う

(1) 特に長期休暇（春・夏・冬）前の注意喚起

- ・コロナ対策、交通事故、飲酒、薬物などを中心に長期休業前にオリエンテーションを通じて注意喚起を図った。

(2) 学生生活アンケートの実施（全学生を対象に2年毎）と支援策の検討

- ・今年度は第2回目の学生生活アンケート実施年度に当たり、全学年ともに回答率75%前後を目指して実施したが、1年生が81%、2年生が98%、3年生が72.6%、4年生が51%であった。今後、公開する項目を選定しHP上に掲載することで学生と保護者にフィードバックする予定である。

4) 学生自治会活動を支援する

(1) 自治会の運営（次々回総会の開催、会計事務など）の支援

- ・新入生歓迎会では学生自治会やさんさ踊りの紹介を行い、交流会は中止した。4月に自治会総会をGoogle formsで行い、役員選挙を10月に実施した。新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、学生の自主的活動が制限されたこともあり活動は低調に終わった。しかし、感染拡大の予防に協力が得られたお陰で、学内にクラスターが発生する事態は回避できた。学生と学生自治会の協力のお陰である。

(2) 鶴鳩祭の企画・実施への支援

- ・今年度は新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、中止となった。

5. 次年度に向けた課題

1) 1・2年生に対して学年担当とそのもとにアドバイザーを担当する教員を配置している。配置人数の確保が難しくなることが考えられるため、工夫の上、アドバイザーの教員数を確保する方策を検討する必要がある。また、基礎ゼミナールでは1グループ6～7名と少人数の体制が確保されており、基礎ゼミナールを担当する教員が長期間・定期的に1年生と顔を合わせる立場にあるので、学生個々への面談等の役割を担うことも併せて検討する余地がある。

2) 4年生はこれまでキャリアアドバイザーが担当してきた。最終学年は卒研指導を担当する教員の方が4年生との接触頻度が高くなるため、卒研に取り組む4年生の国家試験対応、就職試験対応、学生生活対応を一括して担当することを検討する余地がある。

3) 現在学務で行っている健康診断において、実施後の再検査や治療など継続管理が必要であることや、学生のなかに身体化（メンタルな問題が身体を通して表出される）とみられる事例や身体疾患（慢性的）を抱え時々悪化する事例がみられるため、これらの問題に専門的に対処する人材（例えば精神科病院を退職した看護師長や看護部長など）の配置を検討する余地がある。

以上

2021 年度 図書・情報管理委員会活動報告

1. 委員会構成

委員長：岡田実

委員：江守陽子（副委員長）、大井慈郎、木村ちひろ、佐藤大介、野中みつ子

庶務：玉川和弥（総務）

オブザーバー：なし

2. 委員会の開催

委員会は 8 月を休会として、以下の日程で計 11 回開催した。

4/16、5/14、6/14、7/14、9/14、10/20、11/10、12/10、1/14、2/7、3/9

3. 委員会活動目標

- 1) 図書、資料、視聴覚教材の整備を進める。
- 2) 図書・図書館の活用を図る。
- 3) 図書館の円滑な運営を図る。
- 4) 情報ネットワークシステム、学内ランの運用・管理・情報管理を進める。

4. 活動内容と点検評価

- 1) 図書、資料、視聴覚教材の整備を進める。
 - ・ 図書・視聴覚教材整備のため、図書・資料購入計画に基づき予算内で年 4 回の図書選定を行い発注した。
 - ・ 定期購読雑誌：和雑誌；27 タイトル（うち 1 タイトルは 2021 年 8 月に廃刊）
外国雑誌：6 タイトル
 - ・ 大学院設置に伴い、計画的な図書（和書・洋書）の発注を行った。
- 2) 図書・図書館の活用を図る。
 - ・ 2021 年度、大学院開学に伴い「岩手保健医療大学図書館利用規定」に土曜日開館（10：00～17：00）や大学院生の貸出条件を追記した。加えて、第 5 条（開館日）の事項に毎月設けている「図書館整理日」を追加した。
 - ・ 土曜日の開館について、図書館と事務局の連携・協力によって滞りなく開館できた。
 - ・ 図書の貸出件数は実習時期と連動して増減している。
 - ・ 文献検索システム（医中誌 Web）のアクセスオーバーをモニターしているが、卒業研究が始まる 3 月に 2 回オーバーした後、卒業研究の作成過程に応じてオーバーしているが、後期からは基礎ゼミナールの課題によるオーバーがモニターされている。VPN 導入後は、自宅からデータベースにアクセスする頻度も高くなっている。
 - ・ 2021 年度はコロナ対応策として、昨年から行ってきた入館・退館時のアルコール消毒、返却図書のアルコール消毒、閲覧テーブルに衝立の設置、密集を避けるための着席場所の適正な配置等を継続してきた。

3) 図書館の円滑な運営を図る。

- ・ 新生を対象に図書館の概要や利用方法などに関するオリエンテーションを行った。
- ・ 1年生を対象に情報処理の授業内で「図書・情報検索ガイダンス」を実施した。
- ・ 図書館の利用を促すため年2回の企画展を実施した。(1回目:「自殺・メンタルヘルス・心のケア」、2回目:「闘病記」)
- ・ 2021年度は学内者の図書館利用を制限する必要はなかったが、コロナ禍の第5・6波の感染拡大に伴い学外者の利用制限を初めて実施した。岩手県が「緊急事態宣言」を発令後、8月19日から学外者の利用を9月30日まで中止とし、10月1日からは利用時間を1時間以内に制限しながら学外者の利用を再開した。その後、第6波の感染拡大に伴い1月25日より学外利用者による図書館利用を当面停止することとし、これは現在も継続中である。
- ・ 土曜日の開館時にカウンター業務の対応を後期から学生に担当してもらうこととなった。アルバイトとして「学生ライブラリースタッフ」を雇い入れ、8名の学生が対応に当たることになった。ついては、10月16日(土)にカウンター業務の研修をした後で従事してもらった。これまで特に問題等なく運営に貢献している。
- ・ 現在使用中の図書館システム「CARIN-i」のサーバー機の保守期限が2022年2月28日で終了となるため、これを延長するよう会計課に相談の結果、延長となった。

4) 情報ネットワークシステム、学内ラン運用・管理、情報管理を進める。

- ・ 開学当初に設置されたPCの一部が、老朽化によって使用不能状態が出始めているため、今後、情報処理室に設置されているPCと貸与のためのPCを計画的に入れ替えるべく予算措置が必要であることを教授会に提起した。会計課と協議の結果、PC63台分の購入を予算計上した。
- ・ 学内のPCのうち当委員会が管理する情報処理室、図書館、共用PCについて、現在の使用状況や性能面に関するヒアリングを行うべく、アンケート調査を行った。その結果、教職員から指摘された問題点の多くは、PC処理速度が遅すぎることによる動作不良がほとんどで、PCのスペック上の問題が明らかとなったと教授会に報告した。
- ・ 教職員への貸与PCの使用状況に関するアンケート調査を行った。その結果、PCの処理能力に問題を感じている教職員がほとんどであった。通常業務に支障がないようなPCに入れ替える方策(例えば、リース契約への変更など)が必要であるという結果を教授会に提案した。
- ・ Zoomの無料通話サービスが終了になるため、コロナ感染拡大に伴う遠隔授業の開催機会の増加などに鑑み、Zoom社との有料契約を取り交わす必要性について危機管理委員会に提案した。その結果、10アカウントを購入する有料契約(時間無制限、300人まで参加可能)が締結された。
- ・ 学内のネットワークが時々切れることへの対応を協議した結果、ネットワーク契約を居住地域以内の通信料に制約される「ベストエフォート型」の契約から「帯域保障型」への変更を検討しなくてはならないが、現段階でも業者と協議中である。
- ・ 遠隔授業を行う際、電波状況に問題のあった各実習室とアリーナにアクセスポイントを取り付ける作業が終了し、今のところWi-Fi環境に問題がないことが確認された。

- ・アクセスポイントを変更し学内を同一機種に統一できたため、ゲスト Wi-Fi の開放が可能になった。これに伴い 2022 年 4 月から非常勤講師と実習助手に開放することとなった。
- ・大学院生に対する VPN の接続方法や Zoom による遠隔講義への参加方法についてオリエンテーションを行った。
- ・ウィルス対策ソフト ESET の脆弱性解消のため必要な措置を講じ、現在、対応を終了している。
- ・文科省から情報に関する注意喚起メールは、今後、総務課担当者と大井先生との間でいったん確認の上、必要なものに限定して教職員に転送することとした。

5. 次年度に向けた課題

- 1) 共用 PC および貸与 PC が通常業務に支障がない様に、そのスペックを見直して計画的な導入及び貸与方法について関係各所と検討する。
- 2) 新型コロナウイルスの感染状況を考慮しながら、学外者の図書館利用の再開について検討する。
- 3) 「学生ライブラリースタッフ」の意見を集約し、学生の目線を参考にしながら今後の図書・図書館の活用を検討する機会を設ける。

以上

2021年度 FD 委員会活動報告

1. 委員会構成

委員長：石井真紀子

委員：清水哲郎、大谷良子、秋本和宏、佐藤恵、工藤美由紀

庶務：中澤瑞穂、後藤泰輔（8月まで）、玉川和弥（9月から）

2. 委員会の開催

委員会は以下の日程で計10回開催した（6月と8月は休会）

4/16、5/17、7/20、9/1、10/20、11/18、12/24、1/21、2/18、3/9

3. 委員会活動目標

- 1) 授業改善に向けて教員相互の授業参観を実施し検証する。
- 2) 授業改善に向けて授業評価アンケートを実施し成果を公開するとともにディプロマポリシー（以下、DP）との整合性について検証する。
- 3) 若手教員の教育・研究力の育成を目指した研修会を検討し開催する。
- 4) 臨地実習指導における課題を明らかにし、FDを検討する。
- 5) 全教職員が参加できるSD研修会を開催し検証する。
- 6) 大学院FD委員会と連携を図りながらFDを企画し、実施・検証を行う。

4. 活動内容と点検評価

- 1) 授業改善に向けて教員相互の授業参観を実施し検証する。

昨年度の計画をもとに、参観教員が授業改善のための新たな教授法等の知見を得ることと、授業を公開した教員が参観教員からのコメントをもとに授業改善の新たな気づきを得ること、それにより本学全体の授業の質を向上させることを目的として実施した。11月9日（火）は一般教養の清水教授が授業「人間の生と死」を公開し、12名の教員が参観した。授業後の意見交換会には8名の教員が参加した。1月6日（木）は成人看護学の石井准教授が授業「人間の生涯発達」を公開し、20名の教員が参観した。授業後の意見交換会には15名の教員が参加した。授業を公開した教員も、授業を参観した教員も相互によりよい授業設計・展開のための工夫・改善について意見交換ができたことから、授業参観の意義はあったと考える。次年度以降も実施する予定である。
- 2) 授業改善に向けて授業評価アンケートを実施し成果を公開するとともに DP との整合性について検証する。
 - (1) 授業評価アンケートの実施

今年度も引き続き講義、実習全科目の授業評価アンケートを実施した。講義科目は全科目共通の設問のアンケート、実習科目は領域によって一部個別の設問でアンケートを実施した。今年度より経常費補助金の申請の関係で授業評価アンケートは本学の教育の質に関する評価項目に該当するため継続的に実施することが必要である。

アンケート結果を受けて教員から提出される授業改善報告書では、授業改善内容に加えて学生の基礎的な学習能力不足の指摘や、大学に対するカリキュラム変更に関する問い合わせ、学校の設備に関する意見、FD 委員会に対してアンケート結果の速やかなフィードバックの希望などの意見が担当教員より出されていたことから、授業改善につながるよう教学委員会と情報を共有した。授業改善報告書は、12 月にホームページ上で公開して学生に周知した。

また COVID-19 感染拡大により非常勤教員との懇談会等、意見交換の機会が減少したことから、従来のアンケート結果のフィードバックを対面で科目代表者のみに手渡しで実施していたものを、メールで担当教員全員に対して直接送信することに変更し、コロナ禍においても連絡を密に行うようにした。

(2) アンケート項目と DP の整合性の検討

授業評価アンケートの項目（内容）と DP との関連性について検討することが今年度の事業計画に掲げられていることから、委員会で検討した。授業評価アンケートはその結果をもって授業を改善し教育の質向上を目指すものであり、DP は卒業時の学生の到達目標である、というそれぞれが目指すところについて確認したうえで、DP に沿った授業評価アンケート項目の関連性の点検ならびに見直しは必要性が認められないとの結論に至った。その一方で、授業評価アンケート項目の見直しについては、方法も含めた検討が必要であり、今後の課題とした。

3) 若手教員の教育・研究力の育成を目指した研修会を検討し開催する。

(1) FD マザーマップ[®]への回答を促しデータを分析する。

FD マザーマップ[®]登録対象の助手および助教、全 14 名全員より回答が得られた。その結果、昨年度に比較すると特に【基盤】【教育】に関して、ほとんどの項目のスコアが下降していた。また【研究】【社会貢献】では、全体的に少し向上はみられるものの例年低い傾向が続いている状況にあった。これらから、今後は基本的な事柄を取り入れながら幅広い視点で研修内容を検討していくことが必要と考えられた。

(2) 東大 FD (インタラクティブ・ティーチング) を実施し評価する。

「大学で教えること」に関する基本的な知識およびスキルの獲得を目的に 5 年前より「東大インタラクティブティーチング」を開催している。対象は本学の新任教員と希望する教員であり今年度は 4 名が参加した。内容は、学生と双方向（インタラクティブ）な学習を促すための知識・スキル・工夫の修得に必要な講義全 15 回を 10 回に組みなおし、1 回あたり 30 分～1 時間程度のプログラムとした。開催期間は 2021 年 7 月 21 日（金）～2022 年 3 月 10 日（土）であり、初回と最終回は講義室で行い、途中の 8 回については個人での視聴とする予定であったが、3 月の全国的な新型コロナウイルス感染症拡大により、最終回も個人の視聴となった。

(3) 科研費書類申請に関する研修会（研究委員会と共同開催）を開催する

昨年度と同様に「科学研究費補助金獲得に向けて」の FD 研修会を、研究委員会と共同で 8 月 6 日（金）に開催し、清水哲郎教授よりご講演いただいた。参加者は 29 名でほとんどの教員が参加していたが、実習期間内の領域もあり、対応のために途中参加や中座もみられた。また研修会場が終了後の予約が追加予約されており、時間的に余裕がなかったことや開催時期とオンデマンド配信等の方法を検討とする課

題があげられた。

また、コロナ感染症対策を講じながら10月1日(金)～10月29日(金)の期間、Zoomによるオンラインと大会議室でのハイブリット形式の併用、その後のオンデマンド配信の方法で鹿糠会計課長より「科研費の不正行為防止と公的研究費の適切な使用について」講演いただいた。オンデマンドに参加した人数の確認はできなかったが、会場参加は7名であった。参加者アンケートより、研修テーマと内容に関して、ニーズに見合った内容であったことが伺えた。また参加形式を工夫したことで参加方法の選択肢が広がり、参加しやすかったとの意見が聞かれたことから、教職員全体でのスケジュールが調整しにくい状況にある中での研修の方法として、今後も取り入れてもいいのではないかと意見があげられた。

(4)「大学新任教員のための研修会(日本私立看護系大学協議会開催)」の開催に関する情報収集を行い、該当する教員に参加を要請する。

日本私立看護系大学協会が例年開催している「大学新任教員のための研修会」は、今年度はZoomウェビナーによるライブ配信により2022年1月29日(土)10:00～15:30に行われ、3名(助教1名、助手2名)が参加した。また2022年2月24日(木)15:00～15:30に学内Zoom配信による伝達講習会が行われ、参加教員から研修会を踏まえて看護教育への活用を検討したプレゼンテーションと質疑応答により内容が伝達された。研修会内容の一部は2022年2月9日(水)～5月9日(月)まで主催者によりオンデマンド配信され、教員で共有された。

4) 臨地実習指導における課題を明らかにし、FDを検討する。

「臨地実習における実習指導の在り方を考える」をテーマに、第4回FD研修会として2月10日(金)に実習委員会と共同開催した。非常勤実習助手3名を含む30名の参加であった。実習委員長である土田幸子教授から本学における実習体制についての説明の後、5グループに分かれ、実習指導で困っている事およびその改善に向けてのグループワークを行った。領域を超えた教員間での活発な意見交換がなされ、様々な実習現場の状況や課題が提示された。今年度は本学の実習指導に対する教員間の意見交換・共有を図ることを目的としたが、今回提示された課題をふまえ、今後も継続した研修会が必要と思われた。

5) 全教職員が参加できるSD研修会を開催し検証する。

実情に合った教職員SDとして、防火防災・環境保全委員会との共催で7月「COVID-19と感染対策について」、8月「一次救命処置講習会(オンデマンド)」、10月「不審者侵入対策マニュアル研修会(オンデマンド)」を開催した。また職員SDとして3月に日本私立大学協会開催の「大学職員に必要な法律の知識(オンデマンド)」を実施した。SD・FD共通の課題として、今年度より経常費補助金申請の関係で参加者を把握することが必要となるため、オンデマンド開催の研修についてアンケート実施等参加確認方法を検討する必要がある。

6) 大学院FD委員会と連携を図りながらFDを企画し、実施・検証を行う

9月24日(金)に「いま求められている研究倫理」というテーマで、東北大学大学院文学研究科(社会学)准教授の田代志門先生による研修会を開催した。昨年度の内容が大変好評であったことと「研究倫理」という内容から、大学院FD委員会との共同開催

とした。

また COVID-19 禍につき、Zoom 配信での開催とした。教員 27 名、事務職員 4 名、大学院生 1 名の計 32 名が参加した。また当日の欠席者のためにオンデマンド配信を行った。引き続き田代先生に講演をお願いしたい、という意見もあり今回も好評であった。Zoom やマイク、カメラ操作に不備があったこと、大学院 FD 委員会との事前打ち合わせが不十分であったことが課題として挙げられた。

5. 次年度に向けた課題

- 1) 授業改善に向けて教員相互の授業参観を引き続き実施する。
- 2) 授業評価アンケートを実施し授業改善報告書を公開するとともに、教育上の課題を明確にし、必要に応じて他部署と連携し解決のための FD 研修会を企画する。
- 3) FD マザーマップ[®]の活用方法を再度検討するとともに、結果を基に若手教員の教育研究力の育成を目指した研修会を検討し開催する。
- 4) 臨地実習指導における FD 研修会を継続して開催する。
- 5) 全教職員が参加できる SD 研修会を開催し検証する。
- 6) 大学院 FD 委員会と連携を図りながら FD 研修会を企画し、実施・検証を行う。
- 7) FD・SD 研修会は引き続き全員参加を要請するとともに、Google forms 等の活用により出席状況の正確な把握に努める。
- 8) COVID-19 感染拡大禍における FD・SD 研修会の安全かつ効果的な開催について、引き続き検討する。

以上

2021年度 実習委員会活動報告

1. 委員会構成

委員長： 土田幸子

委員： 大谷良子（副委員長）、 鈴木るり子、大沼由香、長南幸恵、下野純平、
作間弘美、齋藤史枝、佐藤つかさ、佐藤貢

庶務： 小笠原明香、田中美月

2. 委員会の開催

委員会は以下の日程で計 11 回開催した。

4/20、5/6、6/9、7/15、9/8、10/7、11/11、12/9、1/7、2/10、3/10

3. 委員会活動目標

- 1) 実習施設との連絡調整を推進し、実習環境の再調整を行う。
- 2) 実習指導者との関係の強化を図り、臨地実習を効果的に実施する。
- 3) 教員及び実習指導者の指導力向上を図る。
- 4) 臨地実習評価から実習指導に関する課題を明確にし、解決策を立案する。
- 5) 教育的な実習形態を模索し、完成年度以降の臨地実習計画を検討する。

4. 活動内容と点検評価

- 1) 実習施設との連絡調整を推進し、実習環境の再調整を行う。

実習指導者との関係の強化を図り、臨地実習を効果的に実施することができた。

各臨地実習前に打合せ会議を開催し、意見交換や連絡調整を行った。全領域が関連する病院ではオンラインでの会議となり、意見交換までの時間が確保できず意見交換までには至らなかったが、各実習施設との関係も形成され、実習終了後に意見や感想などを伺えるようになり、次年度の実習方法の修正等に反映することができた。

- 2) 実習指導者との関係の強化を図り、臨地実習を効果的に実施する。

(1) 2021年度は、COVID-19感染状況に対応しながら下表のとおり実施した。

実習科目	学年	実習期間	実習形態
早期体験実習	1	2021年5月7日～5月14日	臨地実習
生活援助実習	1	2022年1月24日～2月4日	代替実習（学内）
療養援助実習Ⅰ	2	2021年5月17日～5月29日	臨地実習（1週間、2週間）
療養援助実習Ⅱ	2	2021年12月6日～12月17日	臨地実習
成人看護学実習Ⅰ	3	2021年6月14日～8月6日	臨地実習
老年看護学実習	3	2021年6月14日～8月6日 2021年11月22日～12月3日 2022年1月11日～1月21日	臨地実習
成人看護学実習Ⅱ	3	2021年11月8日～12月3日	臨地実習

		2022年1月11日～2月4日	
精神看護学実習	3	2021年11月8日～12月3日	臨地実習
		2022年1月11日～2月4日	1/24-2/4 学内実習(花巻 HP)
小児看護学実習	3	2021年6月14日～12月24日	臨地実習
		2022年1月11日～1月21日	
		2022年1月24日～2月4日	保育園のみ代替実習(学内) 8名
母性看護学実習	3	2021年6月21日～8月6日 2021年11月29日～12月24日 2022年1月11日～1月21日	臨地実習
在宅看護学実習	4	2021年5月30日～9月17日	臨地実習
地域看護学実習	4	2021年5月17日～6月4日	臨地実習 (地区踏査のみ学内実習)
総合実習	4	2021年9月27日～10月29日	臨地実習
公衆衛生看護学実習(保健師課程)	4	2021年6月7日～10月1日	臨地実習

(2) 総合実習を実施・評価する。

実習期間を2021年9月25日(月)～10月29日(金)の期間内の2週間とし、各領域で各施設と調整し実施計画を立案し、実施した。

領域名	学生数	実施期間	臨地実習または代替実習
基礎看護学	12	2021年9月27日～10月22日	臨地実習
成人看護学	12	2021年9月27日～10月22日	臨地実習
老年看護学	10	2021年9月27日～10月15日	臨地実習
小児看護学	6	2021年10月11日～10月22日	臨地実習3名 代替実習(学内)3名
母性看護学	7	2021年9月27日～10月29日	臨地実習
精神看護学	9	2021年9月27日～10月15日	臨地実習
在宅看護学	4	2021年10月4日～10月15日	臨地実習
地域看護学	6	2021年10月4日～10月15日	臨地実習

各実習オリエンテーションでは、COVID-19感染症対策を学生自ら自己管理するよう繰り返し指導し、感染者の発生を防ぐことができ、臨地での実習ができた。

(3) 令和4年度臨地実習要項(全学年)を作成する。

昨年度から共通要項、全学年と保健師課程計6冊を別冊として作成している。今年度は、次年度から新カリキュラムの開始に伴い、先行要件や実習科目の実施時期の変更、COVID-19感染症対策の強化を図るようにし、1年次のみの配布とすることにした。各領域で実習評価をもとに1月末をめどに実習方法など見直し、3月末を納品予定としている。体裁を整えた原本は、共有フォルダに収めた。

(4) 令和4年度臨地実習配置表(全学年)を作成する。

①1年次の早期体験実習については、入学生が確定後作成した。

② 2年次の療養援助実習ⅠおよびⅡの配置については、学生居住地調査票をもとに実習施設へのアクセスしやすさ、学習支援の必要度を勘案した配置案を作成した。

③ 3年次の領域実習の配置は、1グループ内男子数を考慮した原案を作成し、委員に合意を得て年間の予定表を作成した。しかし、前期の精神看護学実習が中止となり、後期に振り替えることとなり配置の修正を行った。

④ 4年次は、在宅看護学実習・地域看護学実習・公衆衛生看護学実習を実習場と調整し作成した。総合実習の開始にあたっては、前記実習科目の実習施設との関連から全領域と調整を要した。

(5) 令和3年度の実習施設の契約の確認および実習受入れ人数を調整する。

昨年度内に全領域で計画した各施設の学生数などを調整後、昨年度末および年度初めに依頼文書を学務課から送付し、新年度に入り各施設の担当の委員を窓口の実習打合せの日程を調整し、学生数の再確認を行った。打合せの際には、次年度の依頼も併せて行うようにした。

老年看護学実習では、県立東和病院と南昌病院での実習が開始となった。

(6) 令和4年度の実習受入れ人数の調整と、新規施設の開拓を行う。

在宅看護学実習（訪問看護ステーション、地域包括支援センター）の新規開拓ができた。さらに、総合花巻病院で基礎看護学領域・成人看護学領域の臨地実習、北上済生会病院では基礎看護学領域の臨地実習が可能となった。

3) 教員及び実習指導者の指導力向上を図る。

(1) 教員対象の臨地実習ガイダンスの開催

令和3年4月8日（木）10:30～12:00 大会議室において、新任教員および専任教員に対して臨地実習の位置づけ、年間の実習計画、早期体験実習・療養援助実習Ⅰの概要説明を行い、その後に意見交換を行った。また、11月2日（火）16:30～17:30 大会議室において、専任教員（実習担当教員）を対象に、療養援助実習Ⅱおよび生活援助実習の概要説明を行い、その後に意見交換を行った。

(2) 実習施設における教員研修の実際

各実習前に、実習施設の担当者との関係構築と、学内での実習オリエンテーションへの活用等を目的に、教員が担当施設で1日～半日程度の研修を受入れ可能な施設で、COVID-19感染症対策を万全にして実施した。主な研修内容は、病院と病棟内の施設の見学（学生が待機および休憩場所）、病院と病棟の特色について、病棟の1週間、1日の流れ、病棟看護の特色、入院されている患者の特徴、援助の方法、物品の場所等であった。

(3) 学内研修会の企画と実施

令和4年2月10日（木）13:00～15:00 講義室において「臨地実習における実習指導の在り方を考える」をテーマにFD委員会と共催で研修会を実施した。本学における実習体制の確認、領域を超えた教員間でのグループワークにより、様々な実習現場の状況や課題の共有がなされ、今後継続した研修会が必要と思われた。

4) 臨地実習評価から実習指導に関する課題を明確にし、解決策を検討する。

領域毎に実習評価し課題を明確にしたものを年度末の臨地実習総括にまとめ、次年度への改善計画に反映させた。

実習指導者会議として全領域の実習施設が一堂に介するのは、今年度も実施せず、実習総括を実習施設へ送付した。次年度以降は、領域ごとに実習施設と実習前後の打ち合わせ等を活用して意見交換し解決策の検討や、次年度計画などの説明の場としていく。また、臨地実習指導者会議ではなく、実習指導の向上を目的とした研修会など教育的な会の開催を検討している。

5) 教育的な実習形態を模索し、臨地実習計画を検討する。

(1) 新カリキュラムでは、3年次の授業科目を減らし実習科目への準備学修や事後学修への時間を確保した。今後、各領域で臨地実習前後の活用について検討していく。

各学年や各領域の実習オリエンテーション医療安全とリスクマネジメントについての指導を行い、安全への意識の強化を図ったが、報告不足や記録類の置忘れなど10件のインシデントと、アクシデント1件があり、今後も継続して指導していく。

臨地実習における学生の看護技術のマトリックスを作成し、実施状況を把握した。今後は、ディプロマポリシーにつなげられるよう検討していく。

(2) 令和3年度臨床実習指導者会議を令和4年3月に予定していたが、COVID-19感染症収束見とおしが立たなかったため、今年度も「臨地実習総括」を送付した。「臨地実習総括」は、4学年に実施した全実習の総括をまとめ、全教員と全実習施設とで共有するようにした。また、個別対応を要する学生については実習委員を通じて全領域で共有しており、個別対応を要する学生については、情報を共有し継続的に指導を行っている。

5. 次年度に向けた課題

1) 実習施設の継続的な確保

時間的・経済的側面からも可能な限り、盛岡市内および近隣の施設の確保に努める。

2) 実習期間中の安全管理の強化

- ・記録物やメモ類の遺失については、身体から離さない、帰宅前の荷物確認、学生間で声を掛け合う等の対応を各実習オリエンテーション等での指導を継続する。
- ・学生の自己判断については、事前の確認が重要である。患者に対するケアや処置における学生としての責任の持ち方を考え行動できるよう指導を継続する。
- ・情報リテラシーに関する指導を継続する。

3) 学生自身の健康管理への注意喚起の強化

- ・健康管理のための毎日のセルフチェックの習慣化を推進する。
- ・COVID-19等の感染拡大の要因についての自覚を促す。看護学生として適切な行動がとれるよう指導を継続する。

4) 各領域における代替実習の評価基準についての検討

5) 実習施設との実習前後の打合せ会議の充実

- ・実習施設との実習目標の共通理解と連携を推進する。
- ・各実習前後の打合せ会議等を通して、実習指導者の研修ニーズを探り、研修を企画する。

6) 本学の卒業時の看護技術の到達度の把握と活用

各領域における看護技術項目を明確にし、卒業時の到達度目標を検討する。

以上

2021 年度 地域貢献・国際交流委員会活動報告

1. 委員会構成

委員長：勝野とわ子

委員：土田幸子（副委員長）、清水哲郎、作間弘美、大井慈郎、遠藤麻子

庶務：米野佑香、井上碧

オブザーバー：濱中喜代（学部長）

2. 委員会の開催

委員会は以下の日程で計 11 回開催した。

5/17、6/7（メール）、6/18（メール）、7/1（メール）、7/14、9/9（ZOOM）、9/24（メール）、12/2、1/11（メール）、2/10（メール）、2/22（メール）

3. 委員会活動目標

- 1) 公開講座の企画、運営を行う。
- 2) 地域貢献活動を推進する。
- 3) 国際交流についての具体的な活動を検討する。
- 4) 本学の社会貢献活動の実態把握を行いその体系化を図る。
- 5) 社会に本学の社会貢献活動について積極的に発信する。

4. 活動内容と点検評価

1) 公開講座の企画、運営

2021 年度は、2 講座実施した。新型コロナウイルス感染状況を踏まえ本年度の公開講座は ZOOM 配信によるオンライン講座およびハイブリッド形式を用いたオンライン講座として実施した。

11 月 6 日（土）に臨床倫理研究センターの公開講座として、清水哲郎センター長を講師として看護等医療従事者のための公開講座「本人・家族の意思決定支援と ACP の臨床倫理」を開催し、98 名の参加者があった。また、12 月 11 日（土）には、一般市民を対象とした公開講座「老いのこれから」を開催した。内容は、2 部構成で、1 部で「住み慣れた地域で暮らすとは一介護予防事業の現在」（大井慈郎講師）、「その人らしい生活の実現を目指して一自宅でない場での可能性を事例から考える」（相澤出准教授）、2 部で「ポスト健康寿命期の人生を考える一老活の勧め」（清水哲郎臨床倫理研究センター長）の講演を実施し 44 名の参加者があった。それぞれの講座終了後にアンケート調査を行ったが、2 講座とも参加者の満足度は高い結果であった。本年度予定していた成人看護学領域の公開講座はコロナ禍の影響により次年度に開催することとなった。2022 年度の公開講座の担当領域・部署は、臨床倫理研究センター長清水哲郎教授、成人看護学領域、精神看護学領域、在宅看護学領域となることが確認された。

2) 地域貢献活動の推進

①出前講義の推進

日本国内の新型コロナウイルス感染状況を踏まえ、出前講義の依頼があった場合は、個別に講師派遣の可否を検討した。今年度、出前講義は7件実施し、受講者の評価は高かった。依頼件数は10件あったものの、コロナ禍により2件はキャンセル、1件は延期となっている。今年度は、岩手県立高等学校からの講義依頼が2件、また、開学以来初めて、盛岡市保健福祉課からの依頼が1件あったことから、本学の地域における周知度が徐々に高まってきていると考えられる。また、今年度も昨年に続き、いわて未来づくり機構 復興教育作業部会「いわての師匠」派遣事業の講師派遣依頼があり、奥州市立水沢南中学校で、災害への準備教育を演習も交えて実施し好評であった。

②学外における地方自治体との連携

盛岡駅西口地域包括支援センターとの連携事業として1年生および教職員を対象として「認知症サポーター養成講座」を7月20日に実施した。1年生79名、教職員8名の計87名が参加した。他の活動は新型コロナウイルス感染症の拡大により中止となっている。

3) 国際交流活動

今年度は、学生の国際的な視野を広げることまた国際的活動への動機づけを高めることを目的に、4年生の選択科目「国際看護論」において、勝野教授、土田教授、作間講師が欧米の看護学教育、看護実践などについて講義した。今後も学生の関心度の高い企画や開催時期および対象学年等について検討する必要がある。本学における国際交流の在り方や推進する方針について引き続き検討する。

4) 社会貢献活動の実態把握

今年度も新型コロナウイルス感染症の感染拡大状況が続いていることから、実態把握については引き続き検討することとした。

5) 社会貢献活動の社会への発信

公開講座については、大学HPを通しての情報発信を行った。

6) その他

①外部団体への施設貸し出し

2021年度は9件の貸し出しがあった。

5. 次年度に向けた課題

- 1) 新型コロナウイルス感染症拡大予防策をとりながら活動を続ける工夫が必要である。
- 2) 公開講座の参加者の増加を図る方策を検討する。
- 3) 出前講義のさらなる推進を図る。
- 4) 地方自治体との連携など地域貢献活動の推進を検討する。
- 5) 国際交流活動の推進を検討する。
- 6) 本学の社会貢献活動の実態把握と体系化を検討する。

以上

2021年度 研究委員会活動報告

1. 委員会構成

委員長：木内千晶

委員：相澤出（副委員長）、江守陽子、勝野とわ子、大井慈郎

庶務：山岸朋夏、井上碧

2. 委員会の開催

委員会は以下の日程で計6回開催した。

4/28、5/25、8/3、10/11、12/14、2/8

3. 委員会活動目標

- 1) 研究の活性化を図る。
- 2) 競争的資金の獲得を推進する。
- 3) 研究環境を整備する。
- 4) 研究に関する規程を整備する。

4. 活動内容と点検評価

- 1) 研究の活性化を図る。
 - ・2021年学内共同研究を募集し審査を行った。2題のプロジェクト研究、3題の共同研究が申請され、学長の最終決定を経て、大学が提示する共同研究プロジェクト課題2件、申請者が自主的に設定する課題3件が採択となった。
 - ・2021年学内研究報告会を開催した。12月1日に学内研究報告会の演題募集の告知を行い、登録締め切りを1月中とした。2題のプロジェクト研究、3題の共同研究、1題の個人研究、計6題の登録があった。抄録締め切りは2月中とした。3月10日に報告会を開催し、教職員31名の参加があった。活発な質疑応答があり研究成果を共有することができた。
- 2) 競争的資金の獲得を推進する。
 - ・科学研究費補助金獲得に向けたFD研修会をFD委員会と協働で開催した。8月6日に濱中学長より「科研費獲得に向けたメッセージ」、清水教授より「大学教員としての研究及びその社会還元と科研費」の講演を行った。終了後の参加者アンケートでは、研修会内容としては、本学の科研費獲得に対する方針が明確になった、具体的な実体験を知ることで教員の認識につながった等、おおむね好評であった。開催時期については、今年度より科研費応募期間が早まったことを踏まえ、前期の日程としたが、実習最終日であったことなどを考慮すべき点もうかがえた。来年度の課題としたい。
 - ・新たに科研費申請セカンドオピニオン体制を導入した。科研費の採択は複数人で審査され、必ずしも同じ分野の研究者が評価するわけではないことを踏まえ、今年度は多角的な視点によるチェック体制を構築し、多くの研究者に理解される申請書を作成することにより科研費採択率向上を目指した。具体的には、領域を4グループ

に分け、所属するグループ内の他領域の教員にチェックをしてもらうこととし、学術的意義・社会的意義、論旨の一貫性を見てもらうという形にすることで、コメントする側の負担を抑える配慮をした。科研費の申請は6件で、全教員が科研を申請するという本学の方針には至らない状況であった。

- ・ 科研費申請に関するアンケート結果（回答者 25 名、回収率 75.8%）は、申請できなかった理由としては、研究時間の確保が難しいこと、申請書を書く研究内容が充分にないことが挙げられた。科研申請については大学の方針と現状にギャップがあるため、今後どのような方策をとっていくかが課題である。
- ・ 外部資金獲得のための研究助成公募等の情報を収集し、全教員宛にメールにて情報を配信した。

3) 研究環境を整備する。

学内共同研究費の残額において、複合機・コピー機の代替もしくは輪転機の購入に充てられないか検討継続中である

4) 研究に関する規程を整備する。

「岩手保健医療大学の研究活動における行動規範」を整備した。

5. 次年度に向けた課題

- 1) 研究の活性化を図るため、研究環境、研究体制を整備していく。
- 2) 科研費に関する FD は科研費の申請に直結する内容を吟味し、開催時期について検討する。オンライン開催、オンデマンド配信を考慮していく。
- 3) 科研費の申請は全員の提出を目標としているが、研究時間の確保が難しい等の理由から目標には至っていないため、目標設定、研究体制の見直しを行っていく。
- 4) 統計ソフトを快適に使用できる環境にするために、十分なスペックのパソコンを整備していく。

以上

2021年度 自己点検評価委員会活動報告

1. 委員会構成

委員長：濱中喜代

委員：清水哲郎、木内千晶、相澤出、晴山均

庶務：七尾明恵

オブザーバー：池本龍二常任理事

2. 委員会の開催

委員会はメール会議も含めて以下の日程で計3回開催した。

6月（メール）、1/3、3/22

3. 委員会活動目標

- 1) 自己点検・評価報告書の作成及び公表を進める。
 - ① 各委員会から提案された活動内容に関して、事業計画も含めて必要な内容が網羅されているか点検し、必要時検討を求める。
 - ② 年度末に各委員会から活動報告及び各領域の研究業績報告の提出を依頼し、点検整備したうえで、教育・研究年報として小冊子を作成する。
- 2) 外部評価、認証評価及びその他の第三者評価に関して、必要なデータの整理及び情報収集に努める。
- 3) 法人の中期計画の策定及び評価において、教育・研究部会の主メンバーとして活動を進める。

4. 活動内容と点検評価

- 1) 自己点検・評価報告書の作成及び公表を進める。

6月メール会議で委員会活動目標案及び他の委員会から提出された活動目標案について確認した。大学院の自己点検評価委員会との合同会議で自己点検・評価報告書の作成について詳細を検討し、合本1冊で作成することとした。年度末に各委員会から活動報告及び各領域の研究業績報告の提出を依頼し、点検整備したうえで、教育・研究年報として小冊子を作成した。
- 2) 外部評価、認証評価及びその他の第三者評価に関して、必要なデータの整理及び情報収集に努める。

外部評価、特に日本看護学教育評価機構からの情報収集に努めた。
- 3) 法人の中期計画の策定及び評価において、教育・研究部会の主メンバーとして活動を進める。

法人の中期計画の策定及び評価において、教育・研究部会の主メンバーとして活動を進めるとともに、令和5年度の日本高等教育評価機構の受審に向けて、中期計画・評価委員会と連携して活動を進めた。

5. 次年度に向けた課題

- 1) 自己点検・評価報告書の作成及び公表
- 2) 日本看護学教育評価機構からの情報収集の継続
- 3) 令和5年度の日本高等教育評価機構の受審に向けた対応

以上

2021 年度 防火防災・環境保全委員会活動報告

1. 委員会構成

委員長： 齋藤史枝

委員： 佐藤恵（副委員長）、吉岡智大、添田咲美、鹿糠全、畠山佐智子

庶務： 玉川和弥

オブザーバー： 濱中喜代（学部長）

2. 委員会の開催

委員会は以下の日程で計4回開催した。

4/19、6/4、9/6、2/9

必要時適宜メール会議を実施した。

3. 委員会活動目標

- 1) 緊急時対応および教職員の健康障害を予防するための啓発を行う。
- 2) 大学運営に影響を及ぼすと考えられる感染症について注意喚起し、感染症のアウトブレイクを起こさないよう、環境整備と啓発を行う。
- 3) 学生・教職員が災害時および緊急時に迅速かつ適切に対応できるよう避難訓練・防災訓練の実施と資機材の充実を図る。
- 4) 防犯に関する周知と啓発を行う。
- 5) 学内で適切な廃棄物処理が行われるよう、管理の徹底を行う。

4. 活動内容と点検評価

- 1) 教職員の緊急時対応および教職員の健康障害を予防するための対策について

- (1) 健康障害に関連する研修会の実施（一次救命処置、感染対策等）

①一次救命処置講習会

新型コロナウイルス感染症拡大に伴い集合研修から動画視聴によるオンデマンド講習会へと変更した。結果、参加者33名（職員15名、教員18名 参加率64.7%）であった。アンケート回収率は63.6%であった。アンケート結果より、講習会の内容を理解できたか、時間は適切であったかについて、全員が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を選択しており、内容および約8分間の動画時間は妥当であったと考える。

次年度に向けて、コロナ禍の状況を鑑みてオンデマンド講習会を含め、講習会の在り方を検討していく必要がある。オンデマンド講習会については、内容に関して、急変時対応のシーンやノイズ、要望については今後検討していく。

②感染対策に関するSD/FD研修会

7月21日に「COVID-19と感染対策について」をテーマに齋藤委員長が講師を担当し、FD/SD研修会を実施した。参加者35名（職員14名、教員21名 参加率68.6%）であった。タイムリーな話題でCOVID-19の感染者数も増加傾向の時期であったことからニーズもあり、おおむね好評であった。

次年度に向けて、学外の専門家からの講習会等 COVID-19 の感染状況を考慮しながらニーズに合った講習会の開催を検討していく。

(2) 教職員の健康診断受診の啓発（目標 100%受診）

健康診断は教職員全てが受診し、目標を達成することができた。

2) 感染症発生時の対応について

(1) 手指消毒等感染症罹患対策

①手指消毒剤の使用啓発と管理

手指消毒剤の使用量の確認とボトルの交換は、6 ヶ月毎に施行していた。例年 6 月と 12 月に行っていたが、委員の時期的な業務内容を考慮し、8 月と 2 月に変更した。2022 年 1 月現在、学生、教職員から COVID-19 やインフルエンザの感染の報告はないものの、8 月に施行した際の手指消毒剤のボトルの使用量は 21 本と昨年より少なく、使用頻度の減少が認められたため、改めて啓発が必要である。

②除菌・抗菌剤（什器消毒用）の使用啓発と管理

学内における除菌・抗菌剤（什器消毒用）の望ましい使用方法を検討・啓発し、管理を行った。加えて、2021 年 5 月からは、危機管理本部からの要請により、講義室とアリーナに除菌・抗菌剤（什器消毒用）とペーパータオルを設置し、使用啓発の掲示を行い、授業終了後に学生自身が除菌・抗菌を行うよう促した。

(2) 学生・教職員に対し、感染性疾患の流行時期にメールや掲示などでの注意喚起

6 月と 12 月に感染症（対策）の注意喚起ポスターを作成し、メールによる周知、大学内の掲示、大学のホームページの掲載を行った。6 月は COVID-19 に関して、12 月は冬季の感染予防としてインフルエンザと感染性胃腸炎について作成し掲示を継続している。

また、昼食時間帯に昼食時の会話の制限などの内容を放送し注意喚起を図った。

(3) 感染対策マニュアル等の見直し

感染対策マニュアルに関しては、COVID-19 等指定感染症の情報と学内感染発症時のフローチャートを追加し、改定を行った。感染に関する情報は流動的であり、適宜確認し修正していく必要がある。

3) 防火防災について

(1) 教職員・全学年対象の避難訓練及び 1 年生を中心とした防災訓練・避難訓練

2021 年 10 月 6 日（水）2 コマ目に、1 年生 75 名（参加率 92.6%）・新任教職員 6 名の計 81 名（消防署へは担当教職員を含めて参加者 105 名で申請済）で防災訓練を実施した。新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響の為、昨年度に引き続き盛岡消防本部の派遣中止となり、今年度も大人数が会する避難訓練でなく、少人数グループでの防災教育を主とした防災訓練とした。訓練後のアンケートにおいて、訓練の到達目標（1. 防災設備及び避難設備の設置場所を理解できる 2. 防災設備及び避難設備の使用方法を理解できる。 3. 日頃から防災意識を持ち、発災時に備える）に対応した設問に対し、回答者全員が「できた」又は「ややできた」という結果に基づき、目標達成できたものと考えられる。

(2) 安否確認連絡システムの見直し

5月1日に宮城県沖での地震発生時に安否確認連絡システムを発動し、危機管理本部と連携し情報を発信した。発災後22時間まで経時的に返信状況を確認した。5月6日9時までに全学年および教職員の9割以上の安否が確認でき、以降は学務課および総務課に安否確認を委譲した。安否確認システムに対する教職員、学生の反応は良好であり、毎年テストを繰り返していたこと、3月に地震が発生し安否確認システムを発動していたことが影響していると考えられる。発災後の安否確認システム発動後の管理に関して、連絡確認の役割を総務、学務に引き継ぐタイミングについて検討した。委員長は災害対策本部からの指示を受け安否確認を送信後、総務、学務に権限を付与、災害対策本部に中間報告をした時点で引継ぎとし、以後はそれぞれの課に確認を継続していくとする、連絡経路等フローチャートを整備した。安否確認時に本人確認が困難な事例が問題となり、安否確認内容についても検討し修正した。今後も適宜修正していく必要があると考える。

(3) 教職員・学生を対象とした安否確認連絡システムのトレーニングの検討と実施、ならびに教職員の緊急連絡網の訓練

緊急連絡網のテストを7月3日(土)に開始し、1時間24分後に終了した。自分の次に誰に連絡するのか全員が理解していたが、連絡が取れない場合などへの対応のルールへの検討等課題が示された。また、トレーニング後のアンケート結果について、いつ何時連絡があるのかと意識する機会になったという肯定的な意見の半面、①教授会報告から実施までの期間が短い、②訓練は毎回土日の日中に行うのか、③2系統ともに電話に出ず次に人も不在の場合、いつまで連絡し続ければ良いかわからない、すぐに電話に出られなかった時などの細かいマニュアルがあれば良い等の意見もあり、トレーニングの実施要項の作成等、検討が必要である。

(4) 学内及び学生用の防災に関する資機材の充実

防災に関する備蓄・資機材について、外での使用が想定されるテント・テント用砂袋・ブルーシートは、アリーナの倉庫にて配備した。また、水害により1階が水没する事態を想定し、使用不可となる可能性が高い物品一式を4階倉庫へ移動した。

4) 防犯について

(1) 教職員への不審者侵入対応マニュアルの啓発・周知

新型コロナウイルス感染症まん延防止の観点から、クラスルームを利用した動画研修会へと変更した。参加者は38名(職員15名、教員23名 参加率74.5%)であった。研修会自体は概ね高評価であった。今後も啓発方法を検討し、継続して実施していく必要があると考える。

(2) 不法者侵入対応マニュアルの見直し

不審者侵入時対応マニュアルについて見直しを行い、改訂を行った。改定後、教職員への周知を行った。

(3) 防犯カメラ作動状況の確認

学内防犯カメラが問題なく作動していることを確認した。

5) 廃棄物処理について

(1) 盛岡市のごみ分別に沿い、ごみの分別の徹底

ゴミ分別に関して、トラブルはなかったため、今後も継続していく。

(2) 演習等で使用した医療廃棄物については、適切な管理法の検討

医療廃棄物に関して、適切な管理法を適宜確認し、処理することができた。

5. 次年度に向けた課題

1) FD/SD 講習会の企画や在り方の検討

2) 感染対策の周知・徹底の継続

3) 各種マニュアルの見直し

4) 防災に関する備蓄・資機材の整備

以上

2021年度 研究倫理審査委員会活動報告

1. 委員会構成

委員長： 江守陽子

委員： 相澤出（副委員長）、伊藤収、勝野とわ子、清水哲郎、鹿糠全

外部委員： 児玉清隆

庶務： 七尾明恵、山岸朋夏

2. 委員会の開催

委員会は以下の日程で計8回開催した。

5/11、7/13、10/13、11/10、12/8、1/12、2/9、3/9

3. 委員会活動目標

- 1) 本学の教員・大学院生の計画する研究の研究倫理審査を行う。
- 2) 研究倫理に関する研究者への教育・講習を担う。
- 3) 公正な研究倫理審査体制を整備する。
- 4) 審査委員の教育・研修に努める。

4. 活動内容と点検評価

- 1) 本学の教員・大学院生の計画する研究の研究倫理審査を行う。
 - (1) 教員の研究計画書について11件の審査を行った。うち取り下げが2件、承認7件、研究計画の変更申請2件（いずれも承認）であった。
 - (2) 大学院生の研究計画について5件の審査を行った。本年度中に承認に至ったものは2件、次年度に持ち越したものが3件あった。
- 2) 研究倫理に関する研究者への教育・講習を担う。
 - (1) e-ラーニングによる研究倫理に関する自己学習の受講は100%であった。
 - (2) 2021年09月に、田代志門先生を講師として「今求められている研究倫理」講演会を、SNSシステムを利用して開催した。参加者27人、対象者の81%が参加した（FD委員会報告参照）。
- 3) 公正な研究倫理審査体制を整備する。
 - (1) 審査員は男性5名、女性2名、分野を異にする看護専門職の教員3名、医学・医療系以外の社会科学分野の教員1名、倫理学・哲学を専門とする教員1名、倫理審査の経験豊富な教員以外の者であって、財務を専門とする者1名、岩手保健医療大学以外に籍を置く者であって、被験者を代表する者1名、により構成されている。
 - (2) 各審査委員の意見がもれなく反映されるように、審査は各審査員が事前に文書により提出された審査報告書に基づいて合議するものとした。したがって、全ての審査委員の意見を集めることができている。

(3) 可能であれば、学外の識者の参加を検討したい。

4) 審査委員の教育・研修に努める。

(1) e-ラーニングによる研究倫理に関する自己学習を行なった。

(2) 2021年09月に、田代志門先生を講師として「今求められている研究倫理」講演会に参加した。

(3) 研究倫理審査委員に向けた教育・研修を検討する。

5) その他

(1) 今年度の活動計画では、委員会開催は年10回とし、4月と8月の委員会を休会とすることとした。しかし、大学院生の修士論文の進行状況に鑑みて、4月の審査の強い要望があったため、次年度の対応を検討することとなった。

(2) 本年度は、開学始まって以来の研究倫理申請が最も多かった。

5. 次年度に向けた課題

1) 迅速かつ適正な研究倫理審査の実施

2) 研究者に対する研究倫理教育の普及

3) 公正・公明な研究倫理審査体制の維持・整備

4) 審査委員の教育・研修と次世代養成

以上

2021年度 国家試験対策支援委員会活動報告

1. 委員会構成

委員長：長谷川幹子

委員：下野純平（副委員長）、石井真紀子、佐藤 恵、吉岡智大、加藤美幸、
石田知世、晴山 均

庶務：伊藤庸子、中澤瑞穂

2. 委員会の開催

委員会は以下の日程で計11回開催した。（8月は休会とした。）

4/7、5/17、6/11、7/21、9/6、10/21、11/15、12/10、1/7、2/15、3/14

3. 委員会活動目標

- 1) 看護師および保健師国家試験を受験する学生に対して学習方法と学習環境の側面から支援する。
- 2) 受験生の国家試験対策に資するべく学年毎に各種の国家試験模擬試験や内外部国家試験対策講座を企画・実施する。また、国家試験模擬試験については、その結果をフィードバックする。
- 3) 各国家試験受験に伴う事務を滞りなく代行する。
- 4) 国家試験対策学生委員会の組織化にむけて、国家試験対策学生委員の各種活動を支援する。

4. 活動内容と点検評価

- 1) 看護師および保健師国家試験を受験する学生に対して学習方法と学習環境の側面から支援する。
 - (1) 国家試験対策ガイダンス
年度始めに国家試験対策ガイダンスを実施し、大学の取り組みや国家試験に臨む姿勢、効果的な学習方法について伝え、早期からの国家試験対策を促した。
 - (2) 学習環境の充実化
授業時間以外に演習室や情報処理室を提供し、学生のニーズに応じて土曜日も大学や図書館を開放するなど学習環境の充実を図った。また、図書館においては、国家試験に関連した図書の改訂版を購入・開架し情報の更新を図った。さらに、国家試験対策オンライン学習システムを導入し、学生の学習習慣化や効率的な国家試験対策を目指した。
 - (3) 国家試験対策 Week
4年生後期（12月）に国家試験対策 Week（2週間）を設定し、国家試験対策を集中かつ強化する期間を設けた。学生の反応から、国家試験に向けた自己学習方法や生活リズムの確立、他学生との情報交換の機会にもなったことが推察された。
 - (4) 卒業生による講演会
卒業生による講演会（9月、12月、1月）を実施し、卒業生から受験生に対して

各時期に応じた国家試験対策への取り組み方や学習方法、また、国家試験本番の様子などが伝授された。しかし、学生の反応やアンケート結果から、実施時期や時間等の工夫が必要であることが示唆された。

(5) 2020年度看護師国家試験不合格者への支援

2020年度看護師国家試験不合格者4名のうち、希望者2名に対して国家試験対策支援を継続し、滞りなく受験することができた。

2) 受験生の国家試験対策に資するべく学年毎に各種の国家試験模擬試験や内外部国家試験対策講座を企画・実施する。また、国家試験模擬試験については、その結果をフィードバックする。

(1) 看護師および保健師国家試験模擬試験

4年生を対象に看護師国家試験模擬試験を9回(業者模試:7回、学内模試:2回)、保健師国家試験模擬試験を5回(業者模試:3回、学内模試:2回)実施した。下級生においては、3年生3回(業者模試)、2年生2回(業者模試1回、学内模試1回)、1年生1回(業者模試)の看護師国家試験模擬試験を実施した。各模擬試験終了後は自己採点結果を早期にフィードバックし国家試験対策アドバイスを提供するとともに、保証人に対しても最終結果を通知した。

4年生については、12月の看護師国家試験模擬試験結果において成績が振るわない学生と面接し、自主学習を妨げている要因について解決を図り、国試対策への取り組みを促した。また、保健師国家試験模擬試験結果においては、模試の都度、成績向上がみられない学生に対して面接を実施した。

(2) 看護師および保健師国家試験対策講座

看護師国家試験対策講座は、国家試験対策の専門講師による講座を4年生4回、2年生1回実施し、講座終了後のアンケート結果では高い満足度が得られた。また、4年生からの講座希望状況を考慮し、成人・母性・小児看護学の3科目について学内教員による看護師国家試験対策講座を実施した。

保健師国家試験対策講座は、業者による講座を1回実施した。学内教員による講座は3回予定したが、うち1回は新型コロナウイルス感染症拡大に伴い資料配布のみとなり、2回の実施となった。業者および学内教員による講座については、学生の高い満足度を得た。

(3) 看護師および保健師国家試験自己採点会

看護師国家試験の翌日には、感染予防対策を徹底したうえで保健師・看護師国家試験についての自己採点会を行った。

3) 各国家試験受験に伴う事務を滞りなく代行する。

看護師および保健師国家試験の受験に伴う事務を庶務中心に教員がサポートする体制を整えた。今年度は新型コロナウイルス感染拡大により感染予防対策を徹底し、願書作成会(11/11)および受験票配布会(1/31・2/1)、免許申請手続き会(2/15)を滞りなく実施した。また、岩手県准看護師試験の受験事務も庶務が中心に担当した。

4) 国家試験対策学生委員会の組織化にむけて、国家試験対策学生委員の各種活動を支

援する。

1～4年生の国家試験対策学生委員（各学年4～7名）が選出され、国家試験対策学生委員会が組織化された。国家試験対策学生委員の役割には、国家試験対策関連（模試や講座）のアシスタントをはじめ、学生の意見集約や国家試験情報の伝達、国家試験対策スケジュールの検討などがある。各学年を担当する国家試験対策支援委員と定期的に会議を開催し意見交換を重ねながら役割を遂行した。これ以外にも、国家試験対策学生委員が国家試験対策に必要な活動を効果的に取り組むことができるよう国家試験対策支援委員と庶務で支援した。

5. 次年度に向けた課題

- 1) 全学年への国家試験対策ガイダンスは継続し、加えて、4年生に対しては国家試験の専門講師によるガイダンスを実施し、国家試験に対する意識づけや注意喚起を促したい。また、国家試験対策オンライン学習システムについては学生への周知を徹底し、自己学習を習慣化させたい。さらに、国家試験対策 Week や卒業生による講演会については、2021年度国家試験対策支援に関するアンケート結果を踏まえ国家試験対策学生委員と協議しながら、内容や方法を検討していく。
- 2) 模擬試験の業者選定や回数、補強講座の内容については、国家試験対策学生委員と相談しながら、学生の要望に応じて決定していきたい。また、2021年度保健師国家試験合格率低下を受け、近年の保健師国家試験の傾向を分析のうえ、保健師国家試験対策を主目的とした補講の見直しや科目数・時間数の増加、模擬試験結果による指導など対策強化にむけて検討する。
- 3) 岩手県准看受験試験受験に係る支援の継続を検討する。また、願書作成会については、庶務を中心とした事務局が企画・運営に取り組む。
- 4) 国家試験対策学生委員会により、国家試験対策に係る活動を展開している。さらに国家試験対策を目指した検討や活動を進めるにあたり、国家試験対策支援委員と庶務が連携してサポートを強化していく。

以上

2021 年度 カリキュラム検討委員会活動報告

1. 委員会構成

委員長：土田幸子

委員：長南幸恵(副委員長)、鈴木るり子、木内千晶、長谷川幹子、大沼由香、
相澤 出、下野純平、大谷良子、佐藤 貢、武田恵梨子、
濱中喜代 (オブザーバー)

庶務：伊藤庸子、田中美月

2. 委員会の開催

委員会は以下の日程で8月、10月を除き、計9回の委員会を開催した。

4/15、5/7、6/25、7/2、11/27、11/27、12/10 (メール会議)、1/18 (メール会議)、
3/2 (メール会議)

3. 委員会活動目標

- 1) 2022年度から開始する新カリキュラムを構築し、文部科学省に申請する。
- 2) 昨年度のカリキュラム評価を行い、必要な改善を行う。

4. 活動内容と点検評価

- 1) 2022年度から開始する新カリキュラムを構築し、文科省に申請する。

- (1) 新カリキュラム検討予定表にそって新カリキュラムを構築する

新カリキュラムの構築では、①科目の順序性と各学年の開講科目の配分、②臨地実習の先修科目の再検討、③基礎学力の向上をめざし基礎科目の検討などを行い、申請書類を準備した。そしてそれらを、大学の概要「建学の精神」「教育理念」を踏まえた「教育目標」「アドミッションポリシー」「カリキュラムポリシー」「ディプロマポリシー」に新カリキュラムに合わせたカリキュラムマップを作成した。このカリキュラムマップは、2022年度の学生便覧に掲載することになった。

- (2) 文部科学省に申請する。

本学の申請は2021年7月と決まったことを受け、今年度は2022年度からの新カリキュラムの最終確認と提出書類の準備を行い、7月15日に岩手県と文科省へ書類を提出した。その後、11月1日に文部科学省高等教育局医学教育課より「看護師等教育課程の変更承認申請の疑義照会について」メールにて回答を求められた。疑義の内容は地域・在宅看護学実習Ⅰについて①臨地での実習日数の不足②実習目標が不明瞭ということであった。これを受けて科目担当者が実習先に交渉し、実習目標の修正を加え11月10日提出した。2022年2月15日付けで、文部科学大臣から承認された。

- 2) 昨年度のカリキュラム評価を行い、必要な改善を行う。

- (1) 現行のカリキュラム評価を行い、必要な改善を行う。

現行カリキュラムの課題に対し新カリキュラムによる改善は、以下の通りである。

- ①2年次後期の履修時間数が少なく、3年次と4年次の前期が過密である。

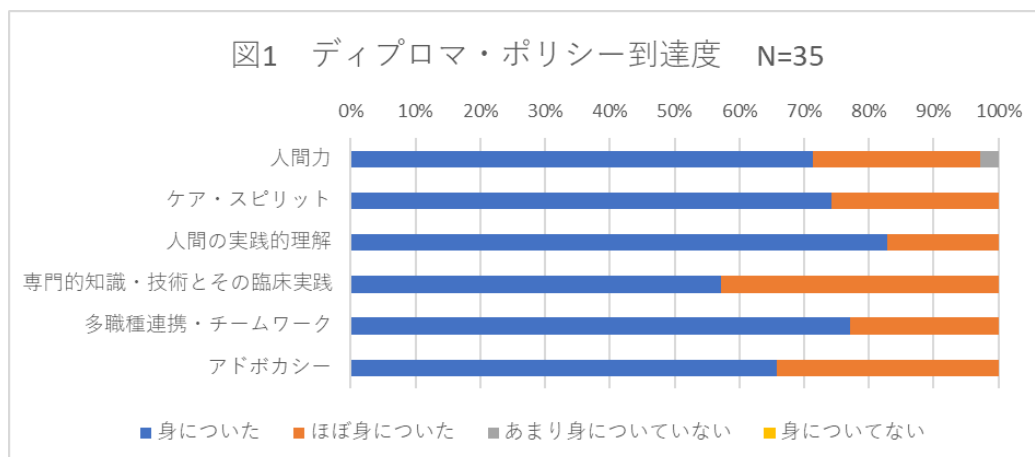
新カリキュラムから、3年前期の科目を2年次で終了するように変更していること、2022年度は療養援助実習Ⅰを8月に行うことで5月の教員不足が解消され、3年次の時間割に余裕ができること、4年次の在宅看護学実習の期間が予定よりも後ろ倒しになっているため、時間割に余裕ができることで改善される。保健師課程の公衆衛生看護技術論が3月から開始する点は、今後の課題である。

② 基礎学力の低い学生への対応

新カリキュラムの学生に e-learning を導入予定であるが、旧カリキュラムの2年生全員にステートメントテストを実施し、学力の低い学生にも利用して学習習慣を身につけさせることが提案された。利用対象の選別方法や具体的な支援方法等を検討するため今後も現1年生の授業態度や学習の様子を共有し継続審議とする。

③ ディプロマ・ポリシーの到達度について卒業生に対するアンケート調査（図1）

今年度は、4年生（2期生）を対象にアンケートを実施した。調査は、ディプロマ・ポリシー6項目それぞれの到達度を4件法で実施し、さらに自由記述で今年1年間の大学カリキュラムへの意見を求めた。その結果、回答率53.0%（昨年度93.4%）で、ディプロマ・ポリシーの到達度（図1）については、全ての項目で「身についた」または「ほぼ身についた」で97%以上を占め、「身についていない」という回答はなかった。今年度は実施時期が遅くなりメールのみでの調査依頼で、昨年度に比べ回収率は大幅に低かった。そのことを踏まえて昨年度調査と比較すると、昨年度ではディプロマ・ポリシーの各項目で「あまり身についていない」と回答した学生が1～3名いたが、今年度は「あまり身についていない」と回答があったのは、「人間力」の項目のみで、回答も1名のみで、「カリキュラム等に関して意識の高い学生」等が多かったことが推察される。昨年度と今年度の調査時期による学生の精神状態を考慮すると、データの単純比較をすることは難しいが、第2期生は第1期生と比較するとディプロマ・ポリシーの到達度が高いことが伺えた。さらに、今年1年間の大学カリキュラムへの意見については、「とても充実していました」のみであった。今後も旧カリキュラムの評価と、新カリキュラムの評価を継続する。



(2) 新カリキュラムで新設した授業科目の内容の検討を行う。

改正の趣旨に合わせて基礎科目、在宅看護学・公衆衛生看護学の見直しを行った。基礎科目では、自然科学系の学力の強化として、看護の基礎化学必修、スタートアップテスト成績下位学生に対して、看護の基礎生物・物理・数理を選択するよう履修指

導を行うことにした。在宅看護学では、3年次に地域ケアシステムを理解する「地域・在宅看護学実習Ⅰ」を、4年次に在宅ケアの実践力を高めるために「地域・在宅看護学実習Ⅱ」を新設した。公衆衛生看護学では、専門科目の科目群に公衆衛生看護の理解を位置づけ、保健師課程の科目とした。

5. 次年度に向けた課題

2022年度からは教学委員会に包含されることになっている。

- 1) 新カリキュラムの適正な実施・評価と、新カリキュラムに必要な改善・対策を講じる。
- 2) 保健師課程の公衆衛生看護技術論の開始時期を検討する。
- 3) 成績不振者に対する基礎学力の強化のための教育方法や指導方法を検討する。
- 4) 旧カリキュラムの科目の順序性を考慮し、開始時期を検討する。

2021年度 大学院 教学委員会活動報告

1. 委員会構成

委員長：岡田実

委員：江守陽子（副委員長）、濱中喜代、勝野とわ子、伊藤收、鈴木るり子、
長谷川幹子（7月から）、佐藤貢

庶務：伊藤庸子、小松俊太郎

2. 委員会の開催

委員会は8月を除く毎月1回の開催を計画し、以下の日程で計11回開催した。

4/22、5/13、6/10、7/7、9/9、10/7、11/11、12/9、1/13、2/10、3/10

3. 委員会活動目標

- 1) 設置趣旨にある大学院のカリキュラム・ポリシー（教育課程編成方針）に基づき教育内容と方法を明確にしながらかつこれを実現する。
- 2) 設置趣旨にある院生の学修環境の整備と充実を図る。
- 3) 設置趣旨にある院生の計画的かつ適切な科目履修を指導する。
- 4) 修士論文作成スケジュールおよび論文審査のプロセスを明確にし、修士論文作成を支援する。

4. 活動内容と点検評価

- 1) 設置趣旨にある大学院のカリキュラム・ポリシー（教育課程編成方針）に基づき教育内容と方法を明確にしながらかつこれを実現するために、下記を行う。
 - (1) カリキュラム・ポリシーの実現状況を随時点検する。
 - ・年度当初のシラバスに基づいた科目の開講と的確な履修を促し、修士論文を作成する基礎的知識と論理的思考を養った。
 - (2) カリキュラム・ポリシーを実現すべく創意工夫を図る。
 - ・講義と演習をバランスよく組み合わせながら、院生相互の積極的なディスカッションを促し、自身の専門領域以外からも学びが得られるように促した。
- 2) 設置趣旨にある院生の学修環境の整備と充実を図るために、下記を行う。
 - (1) 院生の学修環境を随時点検し改善する。
 - ・院生研究室及び院生講義室の点検を随時行い、授業を行う上で必要な物品の購入や飛沫防止用パーテーションの設置、不要備品撤去によるスペースの確保など、学修環境の改善を図ることができた。
 - (2) 院生の学修環境に関する要望を随時聴取し、調整・改善する。
 - ・院生や教員、事務職員と連絡を密に取り合い、備品や講義室等の整備・調整を行ってきた。
 - (3) 学部生との学修環境が調和的であるように調整する。
 - ・院生講義室以外の部屋を授業で使用する場合は、時間割を調整し、大学院・学部双方の授業に影響がないよう配慮した。

- ・要請があった場合は利用日程の調整を行った上で学部生の授業にも院生講義室及び備品の貸出等を行い、有効活用した。
- (4) 年間 2 回程度（前期と後期の適切な時期）、院生と意見交換を図る。
- ・院生の要望や意見交換を行う「院生懇談会」を設け、10 月 9 日（土）に院生 5 名が参加し、前期分の懇談会を行った。聞き取りした内容を本委員会でも共有し、要望のあった学習環境の整備や研修会の開催を行った。今後、後期分の懇談会を行う予定である。
- 3) 設置趣旨にある院生の計画的かつ適切な科目履修を指導するために、下記を行う。
- (1) 院生の生活状況（特に就業中の社会人）に見合った無理のない計画的な科目履修を勧める。
- ・カリキュラムや修了要件を院生に提示し、院生それぞれの専門分野に則した合理的な履修を促した。また、生活状況によって時間割を調整し履修変更を許可するなど、院生の事情に沿って柔軟に対応した。
- (2) 夜間及び土・日の開講に際して、院生の生活に配慮した履修を勧める。
- ・有職者に対しては夜間を中心に開講し、予定に合わせて時間割を調整するなど就業に支障をきたさないよう配慮した。また、育児中や家庭を持つ院生に対しては日中を中心に開講し、集中講義をするなど効率良く履修できるよう配慮した。
- (3) 長期履修や遠隔授業などを活用しながら無理のない履修を勧める。
- ・長期履修生制度を活用している院生に対しては、院生の事情に配慮した履修計画及び研究計画の指導を行い、生活に著しく支障をきたさないよう配慮した。
 - ・2021 年度では対面授業が可能な院生であったため、遠隔授業は行っていない。
- 4) 修士論文作成スケジュール及び論文審査のプロセスを明確にし、修士論文作成を支援するために、下記を行う。
- (1) 論文作成スケジュールを明確に提示する。
- ・学位規程及び論文審査規程に沿って論文作成スケジュールを決定し、9 月中旬に院生及び大学院教員へ周知した。
- (2) 研究倫理審査委員会と連携し、研究計画書の計画的な策定を促す。
- ・初めて研究倫理審査申請を行う院生のため、11 月 29 日（月）、研究倫理審査委員長を講師に招き研究倫理審査について説明会を開催した。この説明会は院生の指導にあたる教員も対象とし院生 5 名、教職員 13 名の参加があった。また、参加できなかった教職員のためオンデマンド配信も行い多くの方に視聴いただいた。
- (3) 修士論文の審査体制を審議する。
- ・2021 年度は修士論文の審査が行われなかったため、2022 年度に持ち越した。

5. 次年度に向けた課題

- 1) 新入生の研究室及び学修環境の整備
- 2) 有職者や遠方から通学する院生への履修指導と授業対応について
- 3) 研究計画中間発表会の実施について
- 4) 修士論文審査体制に係る審議とその準備
- 5) 修士論文発表会について

以上

2021 年度 大学院 入試委員会活動報告

1. 委員会構成

委員長：濱中喜代

委員：勝野とわ子（副委員長）、岡田実、伊藤收、鈴木るり子、佐藤貢

庶務：畠山佐智子、平船果凜、小松俊太郎

2. 委員会の開催

委員会は 8 月を除く毎月 1 回の開催を計画し、以下の日程で計 11 回開催した。

4/22・5/13・6/10・7/7・9/9・10/7・11/11・12/9・1/13・2/10・3/10

3. 委員会活動目標

- 1) 広報活動に努め、優秀な受験者を確保する。
- 2) 2022 年度の入学生に関する試験を適切に準備し、滞りなく実施する。
- 3) 今後に向けて入試のあり方について情報収集し、入学試験方法及び選抜方法を検討する。

4. 活動内容と点検評価

- 1) 広報活動に努め、優秀な受験者を確保する。
 - ・大学院リーフレット、学生募集要項を作成し、東北地区の看護系大学、県内の看護専門学校及び北東北 3 県の病院等に配布し、学生募集要項は HP 掲載して広報に努めた。
 - ・大学院リーフレットを学部のオープンキャンパスで配布し、説明を加え紹介した。また、盛岡駅西口コンコースにある広報用ラックに設置した。
 - ・実習先へ打ち合わせに行く教員には大学院リーフレットの持参と大学院の案内をするよう実習委員会において周知し、その都度対応してもらった。
 - ・広報に関連して、個人情報利用に係る承諾書について学部共通のフォーマットを整備して用いた。
 - ・大学院進学に対して学部の臨地実習施設の反応が良いことから、遠隔授業等の構築について意見交換を行った。優秀な受験者が確保できたと評価する。
- 2) 2022 年度の入学生に関する試験を適切に準備し、滞りなく実施する。
 - ・事前相談票について見直し、それに基づいて事前相談を行った。
 - ・入学資格認定書の体裁について見直し一部修正した。
 - ・入学試験日について受験しやすい日程を再検討し、そのうえで入学試験実施要項について検討した。それに基づいて、教員 12 名、事務 5 名の実施体制で試験を実施した。
 - ・専門科目の出題について副題も含めて担当教員に依頼し準備した。
 - ・最終的に社会人特別選抜 4 名を合格とした。
 - ・一次試験で募集人員を満したため、二次日程は実施しなかった。
 - ・大学院入学過去問題の取り扱いについて、他大学を参考に委員会で検討し、大学院教授会にかけて、大学窓口での閲覧可とし複写不可とした。

試験を適切に準備し、滞りなく実施できたと評価する。

3) 今後に向けて入試のあり方について情報収集し、入学試験方法及び選抜方法を検討する。

- ・大学院進学意向調査アンケートを在学生に実施し、今後の入試のあり方の参考資料にした。
- ・近隣の看護系大学院の進学状況について、東北圏内について情報収集するとともに入学試験方法及び選抜方法について検討した。

今後も継続してより良い入学試験方法及び選抜方法を検討する必要がある。

5. 次年度に向けた課題

1) 広報活動に広く努め、優秀な受験者を確保する。

2) 2023年度の入学生に関する試験を適切に準備し、滞りなく実施する。

3) 今後に向けて入試のあり方について情報収集し、さらにより良い入学試験方法及び選抜方法を検討する。

4) 本学卒業生への進学に関する情報提供の機会をもち、関心が高まるよう働きかける。

以上

2021年度 大学院 FD 委員会活動報告

1. 委員会構成

委員長：清水哲郎

委員：土田幸子、石井真紀子（副委員長）、長南幸恵、大井慈郎、晴山均

庶務：小松俊太郎、中澤瑞穂、玉川和弥

2. 委員会の開催

委員会は以下の日程で計9回開催した。

4/15、5/7、6/11、7/8-27（メール審議）、9/9、10/6、11/25、1/6、3/3、

3. 委員会活動目標

- 1) 学部 FD 委員会と連携しつつ、大学院教育およびその周辺の課題に関する FD・SD 活動を開始する。
- 2) 大学院授業に関する持続可能な評価と改善のシステム作りを目指して、院生による授業評価の導入等を検討し、必要と認めたことを実施する。
- 3) 大学院教育研究の質の向上に必要な FD のテーマを検討し、具体的な企画を立て、実施する。

4. 活動内容と点検評価

- 1) 学部 FD 委員会との連携に関すること。
 - (1) 学部 FD 委員会との連携を図り、FD の内容に応じた協力態勢を整えて、企画・実施にあたる。
 - (2) SD について両委員会の担当者間で企画立案時から合議する態勢を整え、企画・実施にあたる。
 - (3) 次年度以降の両委員会の協力のあり方について検討する。

【活動】

(1)～(3)について、学部 FD 委員長と大学院 FD 委員長がそれぞれ院、学部 FD 委員会の委員となっており、相互に委員会に出席することで、協力態勢や合議して、共同の FD 研修を行うなどした。

【自己点検】

学部 FD 委員会との連携により取り組まなければならない課題は何か、あるいは各委員会が単独で行っている内容を確認し合いながら協議する必要がある。

- 2) 大学院の授業における評価と改善のシステムに関すること。
 - (1) 大学院生による授業評価の導入について検討し、導入する場合には具体的な内容を策定し、実施する。

【活動】

大学院生による授業評価について、初年度となるため学部で実施している授業評価と同様の方法で大学院生に対し google forms による授業評価アンケートを実施し、前期 12 科目（回答率 62%）、後期 13 科目（回答率 67%）であった。

(2) 大学院生による評価以外の評価の可能性について検討する。

【活動】

他の大学院の状況等を調べた限りでは、さしあたっては候補となるものは見当たらなかった。本年度は前項のアンケート調査をまずは始めることにし、他の評価の可能性については次年度以降に継続して検討することとした。

【自己点検】

授業評価アンケートについて、授業毎の履修者が今年度は多くて5名、1名の授業もあり得ることから、アンケート調査をしても有意義な結果がでるか、また大学院生にとって答え難いのではないか、等の点を検討した上で、実施に踏み切った。ただし、より有意義な調査となるよう今後検討を続けること、大学院生に適切な説明をした上で、アンケート調査の案内をすること等とした。

このような経緯を踏まえ、授業評価アンケート実施については、内容や調査の進め方など、次年度以降も、既に行った結果を振り返り、再検討しながら、進めて行く必要がある。

3) 大学院の教育研究をめぐるFDのテーマに関すること。

(1) 次に挙げる事項をはじめとして、FDのテーマの候補を見出し、検討し、重要性・実現可能性の高いものから実施する。

- ・本大学院の現在の教育課程の目的、教育内容・方法について共通理解を図る。
- ・大学院における教員の教育能力ならびに研究指導能力を高める。
- ・大学院教育にも建学の精神を浸透させる。

【活動】

大学院の教育研究や運営にとって必要なFDのテーマを検討した結果、本年度は大学院開設年度であることを踏まえ、本大学院にとって基礎的なことを教職員が共有し協働して今後の運営に関与できることをめざし、本学学長および研究科長を講師としFDとSDとして実施することとした。研修会はCOVID-19感染対策と多くの方が参加できるようオンラインとした。研修会の詳細は、以下の通りである。

メインテーマ：本学の大学院の魅力について

1. 「本学の大学院の特色と目指すもの」 岩手保健医療大学学長 濱中 喜代 先生
2. 「本学大学院の定員確保のために」 岩手保健医療大学大学院研究科長 岡田 実先生

日 時：2022年2月25日（金） 15：00～16：30

場 所：大会議室および各研究室 対象：本学大学院および学部の全教職員

参加者：39名 内訳：教員32名（内2名は院生兼）、職員6名、院生1名

アンケート結果は、研修内容は全員が理解することができ、有意義と回答された。また、日程や事前に資料の配付と送信を行ったことも評価されていた。自由記述としては、次のような意見があった：本大学院設置の経緯や背景、特色や目指すところを詳しく知ることができた、教職員全体で共有することができた。全国の看護系大学大学院の定員数の減少やその背景について共有するよい機会になった。教員としても事務職員としても、大学院の運営に対する意識を高めることができた。大学院を充実

させるための課題とその方向性が理解できて良かった、など、大変好評であった。

【自己点検】

アンケート結果から、大学院のFD・SD研修も、本学の教職員の関心が高いテーマを見出して行うことが、FD・SDとして有意義な研修とするために重要であると言える。今後も研修の質を高める努力を続けたい。

今回は、オンラインを活用し密を回避して実施したが、今後もCOVID-19拡大という事情に限らずオンラインを併用した研修会の開催の希望もあり、ハイブリッド形式のあり方を念頭において企画したい。

(3) 研究倫理に関する研修は、学部FD委員会および研究倫理審査委員会と連携して企画する

【活動】

研究倫理に関する研修を、研究倫理審査委員会、学部のFD委員会と共同で次の通り開催した。

2021年度 第3回FD研修会のお知らせ

「いま求められている研究倫理」

1. 日時 2021年9月24日(金) 10:30~12:00
2. 場所 Zoomによるオンライン開催
3. 講師 東北大学大学院文学研究科 社会学 准教授 田代 志門

参加者は32名(教員27名、職員4名、院生1名)であった。

アンケートから、大変有意義な内容であり、次年度以降も開催して欲しいという意見があった。

【自己点検】

大学院生を参加可能としたが、院生に向けてClassroomを作成・配信や事後アンケートの発送等の作業があらかじめ準備できていなかったため、次年度の課題とする。また、委員会メンバーが対応した会場でのマイクやカメラ操作の不具合が見られたことからスムーズな機器操作も課題である。

5. 次年度に向けた課題

- 1) 授業評価アンケート:今年度の結果を踏まえて、実施するかどうかも含めて、内容、実施方法等の検討を行う。
- 2) FD・SD研修:大学院の研究と教育および運営について教職員にとって関心が高く、研修が必要なテーマを探っていく。
- 3) 学部FD委との連携:連携により取り組まなければならない課題は何か、あるいはそれぞれの委員会が単独で行っている内容を確認し合いながら協議する。

以上

2021 年度 大学院 自己点検評価委員会活動報告

1. 委員会構成

委員長：木内千晶

委員：濱中喜代、相澤出、下野純平、晴山均

庶務：七尾明恵、平船果凜、小松俊太郎

2. 委員会の開催

委員会は以下の日程で計 2 回開催した。

6/1、1/13

3. 委員会活動目標

大学院設置認可申請書の内容に沿って、適切に教育・研究等が履行されているか点検・評価する。

- 1) 自己点検・評価報告書の作成及び公表を進める。
 - ・年度始めに、各委員会の活動計画に関して事業計画を含めた必要な内容が網羅されているか点検し、必要時検討を求める。
 - ・年度末に、各委員会の活動報告及び各領域の研究業績報告に関して点検整備し、教育・研究年報を作成する。
- 2) 設置計画履行状況報告（AC）の教学部分への対応と文部科学省に求められる調査等への対応を遅滞なく行う。
- 3) 外部評価、認証評価及びその他の第三者評価に関するデータ整理と情報収集に努める。
- 4) 法人の中期計画の策定及び評価において、教育・研究部会の主メンバーとして活動を進める。

4. 活動内容と点検評価

- 1) 自己点検・評価報告書の作成及び公表を進める。

初回委員会で、大学院自己点検・評価委員会の規程を確認し、2021 年度の活動目標を決定した。各委員会から提出された活動目標・活動内容に関して、内容が網羅されているか点検し、必要に応じ検討を求めた。また、2021 年度の教育・研究年報について作成要領を検討し学部との合冊案が出され、その後、学部自己点検・評価委員会の審議を経て、大学院・学部の合冊を決定した。

1 月の委員会において、2021 年度教育・研究年報の作成要領ならびにテンプレートを作成し、活動報告の提出締め切りを 3 月 17 日とし委員会と領域に作成依頼を行った。また、教員の研究・社会貢献活動の実績については、各教員から共通の書式に従ってデータを収集した。これらの活動実績等は、本委員会で点検・整理し、教育・研究年報として小冊子を作成した。また Web 上の公開準備を行い PDF 版で公表した。

- 2) 設置計画履行状況報告（AC）の教学部分への対応と文部科学省に求められる調査等への対応を遅滞なく行う。

報告、調査等には滞りなく対応した。

- 3) 外部評価、認証評価及びその他の第三者評価に関するデータ整理と情報収集に努める。

外部評価等に関するデータ整理と情報収集に努めた。令和5年度の大学機関別認証評価受審に向けて、11月16日に「認証評価の概要」について担当者を対象に説明会を実施した。「各基準の評価の視点」「評価の視点に関わる自己判定の留意点」「エビデンスの例示」等について理解を深めた。また、認証評価受審作業分担を検討し、担当部署、担当者を決定した。さらに、各担当者により、基準項目ごとのエビデンスと課題を整理した。

- 4) 法人の中期計画の策定及び評価において、教育・研究部会の主メンバーとして活動を進める。

法人の年度毎の中期計画の点検・評価に当たっては、教育・研究部会の主メンバーとしてこれを行った。

5. 次年度に向けた課題

- 1) 学部・大学院合冊の自己点検・評価報告書の評価
- 2) 認証評価受審に向けての適正な準備
- 3) 法人に置かれる中期計画・評価委員会の一つの部会としての活動の継続

以上

II 教育・研究年報

2021年度 一般教養領域活動報告

1. 領域構成

清水哲郎（教授）、相澤出（准教授）、大井慈郎（講師）

2. 一般教養領域における教育に関する内容と評価

2021年度は、清水教授は学部では、「探求の基礎」（1年次）、「基礎ゼミナール」（1年次、科目担当者）、「看護倫理」（2年次、濱中、石井と共同）、「人間の生と死」（2年次）、「エンドオブライフケア論」（3年次、濱中、石井と共同）、「臨床倫理」（4年次、濱中と共同）を担当した。前年度末に作成した共通のテキスト試行版を使った授業を実施して教育に役立てつつ、さらに改訂して完成させた。

相澤准教授は1年次開講科目「地域の文化」「人間と文化」「ボランティア論」、2年次開講科目「家族という社会」、「チーム医療論」、3年次開講科目「社会と福祉」を科目責任者として担当した。さらに「保健医療福祉連携論」を分担者として講義担当した。1年次開講の「基礎ゼミナール」については科目責任者として担当し、前期には一斉講義を担当し、後期にはゼミ指導を行った。4年生を対象とした「卒業研究ゼミナール」については、計4名（一般教養領域2名、基礎看護領域2名）の学生の研究指導を行った。

大井講師は「情報処理」（1年次）、「調査と統計」（3年次）、「看護研究方法論」（3年次、勝野と共同）を担当した。「情報処理」は、大学生として必要な情報リテラシーの理解やアカデミックスキルなどを学習するものである。本年度はビデオチャットに関する説明を新たに追加した。「調査と統計」と「看護研究方法論」については、量的研究に関する範囲を同じ教員が担当することにより、2つの授業を関連させながら展開することができた。

3. 一般教養領域における研究に関する内容と評価

2021年度は、清水教授は科学研究費助成事業 基盤研究(A)（課題番号 18H03572）4年目（最終年度）の研究活動を行い、以下のように研究成果をまとめた。1)臨床倫理検討システムおよび意思決定支援の研究開発をまとめ、書籍を刊行した。2)研究成果を本学の最新カリキュラムに活かすべく、倫理関係授業の総合的テキストを、医療・ケア従事者の研鑽にも使える書籍にまとめた。3)研究成果の臨床現場への還元として、医療・看護関係の研修等（オンライン開催）にて講演を行った。

相澤准教授は東北地方における地域包括ケア、在宅医療、介護福祉の研究を継続して進めた。新型コロナウイルスの感染状況も考慮しなければならなかったため、フィールドワークなど調査研究を進めにくい状況であったが、今年度は、宮城県における訪問看護ステーションが核となった地域連携や、在宅療養支援診療所と特別養護老人ホームのチームケアの試みを、社会学的視点から事例検討し、その成果のまとめを行った。

大井講師は大きく、2つの研究を実施した。一つは、科学研究費助成事業若手研究(B)（課題番号 17K13838 代表者：大井慈郎）による、インドネシアジャカルタの都市化研究である。本年はそのデータ分析を実施し、現在成果報告書を執筆している。もう一つは、宮城県富谷市、および岩手県盛岡市緑が丘地区と連携し、新型コロナ感染拡大の影響に関する町内会アンケートを実施した。回収したデータは報告書にまとめ、各町内会に還元した。

2021 年度 基礎看護学領域活動報告

1. 領域構成

長谷川幹子（教授）、作間弘美（講師）、野中みつ子（助教）、武田恵梨子（助手）、千田真太郎（助手 10 月就任）

2. 基礎看護学領域における教育に関する内容と評価

2021 年度は、基礎看護学領域に関わる科目として、1 年次学生対象として「看護学概論」（長谷川）、「看護理論」（長谷川）を担当した。また、長谷川教授を科目責任者として「基礎看護援助論」・「ヘルスアセスメント」・「早期体験実習」・「生活援助実習」、作間講師を科目責任者として「生活援助技術論」が開講され、講義・演習をメンバー全員で展開した。2 年次学生対象としては、長谷川教授・作間講師が科目責任者を担い「療養援助技術論」を領域内教員が分担・共同して講義・演習を担当した。また、「看護過程論」は基礎看護学領域の教員全員が担当した。さらに、「療養援助実習Ⅰ」を作間講師と野中助教、武田助手が担当し、「療養援助実習Ⅱ」では作間講師と武田助手、千田助手が学生指導にあたった。4 年次学生対象としては、「総合実習（学生 12 名）」をメンバー全員で担当し、「卒業研究ゼミナール（学生 9 名）」では、長谷川教授、作間講師、野中助教で分担・共同して指導にあたった。

基礎看護学領域で担当する科目は、看護学の基盤としての役割を担うことから、学生の知識・技術の習得だけではなく、看護師としての態度の育成も目指して各科目の講義・演習内容や方法を十分に検討し開講した。また、学生のレディネスを把握しながら、グループディスカッションやグループワークによる調べ学習、反転授業の方略を用いたアクティブ・ラーニング型授業を多く取り入れた。

このようななか、新型コロナウイルス感染拡大により、講義・演習では感染予防対策を徹底する必要があった。看護技術の自己練習においても密を避けるため、20 名を上限とした予約制とした。しかし、新型コロナウイルスがさらに猛威をふるい、「生活援助実習」は臨地での実習中止が余儀なくされ学内代替実習となった。実習内容は、1 学年の半数を交代で 3 日間ずつ、受け持ち患者実習（事例患者の基本的展開、申し送り・担当看護師との実習計画調整、実施、評価、計画の修正、カンファレンス）と学内代替基礎実習（病床環境の観察、対象者の理解、実習場面の類似体験）で構成し目的に沿って実施した。

基礎看護学領域で担当した各科目の授業評価アンケートでは全体的に評価が高く、「教員の意欲」に関する項目は最高点（4.0）を認める科目もみられた。また、自由記述からは、「看護師になるうえで大事なことが理解できた」、「技術面だけでなく患者と接する際の大切なことなども学べた」、「看護学生として意識が高まった」という記述が散見され、看護技術の知識を学び体験することによる看護学生としての意識の高まりや、看護師としてのあり方について学びが大きかったことがうかがえた。さらに、「今の自分が目指したい看護を改めて考えることができた」、「看護の基本となることがわかった。これからどんな看護師になればよいかの土台を作れた」などの意見があり、看護専門職として実践の基盤となる個々の看護観確立の萌芽がみられた。そして、アクティブ・ラーニング

型授業に関しても「グループ学習を進めることで、自分たちの考えをまとめたり、さらに詳しく考えなければならぬ部分がわかったので良かった」、「自分でただ考えるだけでなく、それを資料として言葉にしたりグループで共有したりして考えを深められたので良かった」など肯定的な意見が多くみられた。また、学内代替実習となった「生活援助実習」においては、学生から非常に高い満足度を得るとともに、今後の新たな演習方略を考える機会となった。

今後も教員自らが自己研鑽に励み、さらに質の高い講義・演習・実習の実現に向けた創意工夫を図っていく必要がある。また、実習に関しては、新型コロナウイルス感染拡大が鎮静化し、臨地での実習が可能となるように期待したい。

3. 基礎看護学領域における研究に関する内容と評価

学内プロジェクト研究に所属している教員（作間講師、武田助手）は共同研究活動を行い、今後、その成果を学会発表および論文として公表する予定である。

また、基礎看護学領域として取り組んでいる学内共同研究：「COVID-19 の影響により臨地実習経験の乏しい新人看護師のリアリティーショックと自己効力感についての実態調査」は、調査に着手したところである。今後、調査結果をまとめて学会や論文にて発表する予定である。

さらに、長谷川教授と作間講師は他大学教員との共同研究で取り組んだ研究について看護系学会学術集会で発表した。これについても、論文として報告する予定である。

基礎看護学領域は他領域に比較して、開学時から授業や実習に関わる比率が高く、教育に時間を多く要するなかでそれぞれが研究活動を行ってきた。しかし、2021年度は2名の欠員補充がなされず、基礎看護学領域の教員は教育活動や業務に忙殺され、研究活動を十分に行うことができなかった。

次年度は、基礎看護学領域として教育活動や業務への偏重をなるべく避け、研究活動にも力を注ぎたいと考える。

以上

2021 年度 成人看護学領域活動報告

1. 領域構成

土田幸子（教授）、石井真紀子（准教授）、吉岡智大（助教）、添田咲美（助手）、佐藤大介（助手）

2. 成人看護学領域における教育に関する内容と評価

今年度の担当科目は、成人看護学概論、成人看護援助論、生活習慣看護論、慢性期看護技術論、急性期看護技術論、がん看護論、成人看護学実習Ⅰ・Ⅱ、看護管理論、看護教育論、卒業研究ゼミナール、総合実習、早期体験実習、生活援助実習、療養援助実習Ⅰ・Ⅱ、基礎ゼミナール、看護倫理、人間の生涯発達、エンドオブライフケア論、救急看護論、国際看護論の22科目であった。

1) 専門科目について

(1) 講義・演習について

4年次は領域全員で卒業研究ゼミナール（11名）、総合実習（12名）を担当した。卒業研究ゼミナールでは、終末期看護・手術患者への看護、患者教育等のテーマで研究計画書を作成し発表会を開催し、他領域の教員からのアドバイスを受けた。「総合実習」は各自の目標をもとに終末期看護、慢性期患者の看護、周術期看護に分かれ実施した。特に、今年度は県立中部病院の手術室のご協力により1週間継続して手術室看護を実施できた。学生の準備状況には差があり、実施中も実習に臨む姿勢を高く評価を受けた学生がいた。また、患者との関係が図られず指導を要する学生もいた。さらに、「看護管理論」を土田教授が担当し、看護管理は病棟師長が行うものという認識を払拭することができた。「看護教育論」を土田教授と石井准教授講師がオムニバス形式で担当した。教育とは何か、自分たちが学んでいる看護教育におけるカリキュラム構成の考え方など教授した。選択科目の「救急看護論」「国際看護論」を土田教授がオムニバス形式で担当し、急変時の対応、国際的な視点を持つことの意義と必要性を教授した。

3年次は、前期に「慢性期看護技術論」、「がん看護論」、後期に「急性期看護技術論」を担当し、それぞれの看護の特徴に焦点を当て、成人看護学実習Ⅰ・Ⅱに連動できるよう臨床場面を想定して基本技術の復習と応用を考慮して学内演習を実施した。後期には「エンドオブライフケア論」を石井准教授講師がオムニバス形式で担当し、人間の生を全うするための援助について教授した。

2年次は、前期の「成人看護援助論」では、健康障害を有する対象への援助技術の習得に焦点を当て、成人期に多くみられる疾患の主な検査と治療から看護の基本を教授した。後期の「生活習慣看護論」は、生活習慣と疾病の関連から、成人期における人々の疾病予防と生活習慣の改善の重要性について考えられるよう教授した。さらに、糖尿病で教育入院した紙上事例を用いた看護過程の展開と、演習を実施した。しかし、疾患の理解や看護技術の準備学修にばらつきがあり、今後の授業内容の精練が必要である。

1年次後期には、「成人看護学概論」を土田教授が成人期の特徴、成人看護の意義から、教授した。そして、「看護倫理」と「人間の生涯発達」を石井准教授講師がオムニバス形式で担当し、倫理を学ぶ意義や守秘義務、看護専門職の職業倫理などについて教授した。

(2) 実習科目について

今年度担当したのは、早期体験実習・生活援助実習・療養援助実習Ⅰ・Ⅱ、成人看護学実習Ⅰ・Ⅱであった。1年生の早期体験実習は石井准教授講師・添田助手・佐藤助手、生活援助実習は吉岡助教・佐藤助手が担当した。生活援助実習は代替実習となり、科目責任領域（基礎看護学）から要項が示され、実施した。

2年次の「療養援助実習Ⅰ」は、この実習では、看護過程のプロセスのアセスメントの段階に重点をおいた。COVID-19 感染対策として実習受け入れ中止となった施設があった。この学年は1年次に臨地実習できなかったことから受入れ可能な実習病院に相談し全員が臨地実習できるよう、学内と病院を1週間ずつ実習するグループと2週間病院実習のグループの変則体制で実施した。1週間の学内実習では、各看護過程の段階を個人学習後にグループワークで確認するように展開した。しかし、脳梗塞の理解が浅く、看護過程の各要素の理解不足の学生もおり、個人指導を要した。さらに、学内であったためか緊張感が乏しく、態度の面で指導を要する学生もいた。また、毎日のカンファレンスでは発言が乏しく学びを共有することが難しいグループもあった。

3年次前期「成人看護学実習Ⅰ」、後期「成人看護学実習Ⅱ」を領域内全教員と非常勤実習指導者で担当し、全期間を実習できた。これまでの臨地実習よりも看護度の高い患者を受持ち、看護の基本技術の向上と個別性のある看護の実践に重点をおいた。成人看護学実習Ⅱではコロナ禍であったが、可能な限り周手術期や急性期にある患者を受持ち、病状の変化に対応した看護を展開した。この実習では多くの学生が主体的に行動し、受持ち患者と良好な関係を築き、個別性のある看護を実践できていた。しかし、3クールで体調を崩し1週間欠席した学生が1名、4クールでは実習開始1週間前にアルバイトをした学生がおり実習病院より受入れ中止を言い渡された。この2名については、追実習願と関連書類を提出し、教学委員会から許可を受けて、追実習を実施した。追実習は、学内での代替実習とし、それぞれ個別に課題を提示して実施した。日々の課題をやってこない学生と、課題に積極的に取り組む姿勢がみられた学生に分かれ、前者の学生は自己評価も高かった。

次年度からは、受持ち患者の決定が実習初日の午後になる場合が多く、受持ち患者の病態理解のための時間や図書の確保が困難なことから、実習初日を学内日にし、準備学修の充実を図る。

4年次「総合実習」は12名を担当し、終末期看護・慢性期看護・周術期看護それぞれ各自のテーマに沿って実習病院を決定した。終末期看護では緩和ケア病棟で実施し、病院のスケジュールをもとに各自の週間計画をたて実習に臨んだ。1週目は受持ち患者とじっくり向き合い個別性のある看護を考え、2週目は同室者への看護も考えられるようになっていた。周術期看護では、規模の異なる3病院で実施し、それぞれの病院の役割機能を学ぶこともできた。慢性期看護においては、積極的に基本技術の確実な修得に向けた取り組みをし、病棟スタッフからもとても良い評価を得た学生がいた半面、実習期間中を通して事前学習が不足し主体的な実習姿勢が見られず指導を要した学生もいた。

(3) 基礎科目について

今年度は、「基礎ゼミナール」の前期後半から後期に土田教授がグループを担当し、グループでSDGsに焦点をあて「2030年までのゴールに向けて今、私たちができることは何

か！」をテーマとして取り組み、その成果をポスターで発表した。「人間の生涯発達」を石井准教授講師が担当した。成人期の発達の特徴と関連する理論について概説することで、学生にとって成人看護学概論の学修へと連動できていたと考える。

3. 成人看護学領域における研究に関する内容と評価

今年度は、これまでの学内プロジェクト研究に関する論文作成や学会発表が中心だった。

土田教授は学内プロジェクト研究「タブレット端末を用いた教育方法に関する研究」の共同研究者として研究論文「看護系大学におけるタブレット端末活用に向けた基礎的研究－A 大学学生のタブレット端末活用の実態－」を公表した。石井准教授講師と添田助手は学内プロジェクト研究「ケア・スピリット教育に関する研究」の共同研究者として論文『『ケア・スピリット』に関する看護学生の経年的変化－A 大学看護学生に対する調査から－』を公表し学会で発表した。

個人研究では、土田教授が共同研究者として研究論文「敗血症が疑われる高齢救急患者の予後予測因子についての検討」を公表した。佐藤助手は大学院修士課程の研究テーマの途中成果として、研究論文「手術室器械出し看護師の良い渡し方の分析に関する一考察」を研究会で公表した。添田助手についても大学院修士課程の研究テーマの途中成果として、1 演題「Discontinued consultation in Type2 Diabetes patients in Japan－A literature review」を国際学会で発表した。

今後の課題は、領域としての研究テーマを設定し取り組むことである。

以上

2021年度 老年看護学領域活動報告

1. 領域構成

勝野とわ子（教授）、木内千晶（教授）、齋藤史枝（助教）、赤石美幸（助手）

2. 老年看護学領域における教育に関する内容と評価

1) 老年看護学領域科目

「老年看護学概論」は、1年生の後期に開講した。授業内容の工夫点としては、心理的な介入方法としてのレミニッセンスプロジェクトを課し、高齢者へのインタビューを通し、学生の高齢者と看護に対する興味を育んだ。学生の取り組みの姿勢および達成度は高かった。「老年看護援助論」は、2年前期に開講し、ヘルスプロモーションの活動プランを演習に取り入れる工夫を行い、赤石もこの演習指導に加わった。学生の取り組みの姿勢および達成度も良好であった。「老年看護技術論」は、2年後期に開講し、感染管理を徹底し密を避けながら、技術演習を通して実践に即した方法が修得できるよう物品を整備し授業展開の工夫を行った。4年生9名を対象として「卒業研究ゼミナール」を指導し、文献研究3本、研究計画書6本の卒業研究論文を完成させた。

「老年看護学実習」は3年前期・後期に実施したが、全員が臨地での実習を行うことができた。実習前にヘルスアセスメントや基礎看護技術の復習を行える機会を提供した。また、個々の学生の能力差に配慮し最適な環境下で実習できるように事前に学生面接を行い、実習施設と調整した。学生の実習に対する満足度は高く、実習施設からの評価も高かった。4年生10名に「総合実習」を実施した。学生の満足度、実習目標の達成度および実習施設からの評価も高かった。

2) 看護専門科目、統合科目、その他の臨地実習

1年の「人間の生涯発達」、2年の「看護過程論」、3年の「看護研究方法論」、4年の「救急看護論」の講義、演習を領域教員が担当した。また、実習科目では、1年の「早期体験実習」、「生活援助実習」、2年の「療養援助実習Ⅰ」を領域教員が担当した。2年の「療養援助実習Ⅱ」については、学内および実習施設との調整を行うとともに実習指導の要として機能した。ほとんどの学生の取り組みの姿勢はよく、学生の達成度は高かった。

3. 老年看護学領域における研究に関する内容と評価

本年度は、領域教員が中心となり学内プロジェクト研究の成果を日本看護学教育学会誌に投稿し受理された（筆頭者：齋藤史枝、「看護系大学におけるタブレット端末活用に向けた基礎的研究」）。また、学内共同研究（筆頭者：齋藤史枝）として「介護老人保健施設職員の急変時の感染対策を含めた対応の実態とシミュレーショントレーニングのニーズ」に取り組んでいる。さらに、科学研究費助成事業の外部資金を受け、基盤研究（C）若年認知症家族介護者の経験している「慢性的悲嘆」と健康に関する研究（研究者代表者：勝野とわ子）、基盤研究（C）若年認知症家族介護者の健康問題の「見える化」による支援システムの構築（分担研究者：勝野とわ子）、若手研究高齢者看護に携わる看護補助者のワーク・エンゲイジメント・プロセスモデルの検証（研究者代表者：木内千晶）に

についても取り組んでいる。

以上

2021 年度 母性看護学領域活動報告

1. 領域構成

江守陽子（教授）、大谷良子（准教授）、佐藤恵（助教）

2. 母性看護学領域における教育に関する内容と評価

母性看護学領域が主担当となる科目として、2 年次科目の「母性看護学概論」（江守）、「母性看護援助論」（大谷・佐藤恵）、3 年次科目の「母性看護技術論」（江守・大谷・佐藤恵）、「母性看護学実習」（江守・大谷・佐藤恵）、「セクシャルヘルス・アセスメント（選択科目）」（江守）、4 年次科目の「総合実習（母性看護学領域）」（江守・大谷・佐藤恵）、「卒業研究ゼミナール」（江守・大谷・佐藤恵）を開講した。教育に関する学生からの授業評価は概ね「よくわかった」、「面白い」等々、肯定的・高評価の反面、期末試験の成績を見ると、必ずしも学習成果に結び付いていない可能性があり、今以上に学生が興味を持って自ら学ぶ意欲を高められるような教授法を工夫する必要があるかもしれない。成績の良くなかった学生には試験問題・解答用紙を点検し、学習すべき項目を具体的に提示し、知識・技術の定着を促している。

母性看護学領域の領域別実習、総合実習では、実習施設の確保が難しく、北上市、花巻市、遠野市、一関市にある病院等施設を利用している。総合実習では宿泊が必要なため、学生のみならず教員の負担も大きい。また、今後の実習施設としての確保の点でも不確実性が高く、悩ましい。

大学院では 1 名の修士の学生を迎え、母性看護学領域の大学院研究にも取り組んでいる。

母性看護学領域の教員は 3 名であり、今後とも学部と大学院の教育活動を効率よく展開するよう努めたい。

3. 母性看護学領域における研究に関する内容と評価

大谷准教授は、2019 年度科研費助成事業の若手研究に採択された研究を本年度も継続している。今年度は、COVID-19 の影響によりデータ収集が思うように進まず、遂行計画の変更が必要となった。そのため、1 年の研究期間延長の手続きを取った。大谷准教授、佐藤恵助教、江守教授は、「不妊治療後出産した女性の出産体験」について論文としてまとめた（日本生殖看護学会誌、18（1）、11-19）。ほかに、大谷准教授、江守教授は、学内プロジェクト研究：「看護学生の職業的アイデンティティと地元志向に関する研究」について、今年度も継続して調査データの収集、分析を行っている。

一方、佐藤恵助教は、2019 年度科研費助成事業の若手研究が最終年度を迎え、総括報告書を作成中である。また、学内プロジェクト研究：「ケア・スピリット」に関する質問紙調査の成果を佐藤恵助教が筆頭者となってまとめたものが、岩手看護学会誌に採択された。さらに、佐藤恵助教、大谷准教授、江守教授の 3 名で行っている学内共同研究：「新型コロナウイルス感染症蔓延時の妊産婦ケアの実態」では、妊産婦の側からの聞き取り調査とウェブシステムを利用したアンケート調査を行っている。聞き取り調査は 11 名に達したが、アンケート調査の集まりが未だ十分ではないため続行中である。

次年度以降も母性看護学領域として、研究活動を発展・充実させ、微力ながらも社会に

貢献できるような成果を発出していきたい。

以上

2021 年度 小児看護学領域活動報告

1. 領域構成

濱中喜代（教授）、下野純平（准教授）、秋本和宏（助教）、遠藤麻子（助手）

2. 小児看護学領域における教育に関する内容と評価

2021 年度は「基礎ゼミナール」を下野准教授が GW を担当した。関連科目として「人間の生涯発達」を濱中教授が科目責任者として担当した。例年同様に発達理論、小児の発達段階、各期の特徴について概説した。その学びを踏まえて、2 年の「小児看護学概論」を展開し、小児看護学の在り方について教授した。他に「看護理論」を担当し、下野准教授、秋本助教、遠藤助手は「看護過程論」を担当した。後期の「家族看護論」は濱中教授が科目責任者として家族看護学の基礎について教授した。同じく後期には下野准教授が科目責任者として「小児看護援助論」を担当し、小児の看護援助方法、看護過程について教授した。3 年前期の「小児看護技術論」は実習前に必要な技術について、下野准教授を科目責任者として、演習中心にメンバー全員で展開した。また濱中教授は「エンドオブライフケア論」を担当した。卒研ゼミナールにおいては 6 名の学生を指導し、手ごたえのある結果を得た。「小児看護学実習」は保育園では 2 施設加え 4 施設で、病院では県立病院 2 施設で行った。コロナ禍ではあったが、病院実習は全部、保育園実習は最後の本宮保育園の 2 回の学内代替実習以外は臨地で行い、全員実習目標が達成できた。4 年生の総合実習はクリニックでの実習が学内になり、クリニックの医師に講義を依頼し補填した。まとめでは臨地でできたグループと学びを共有した。濱中教授は清水と「臨床倫理」を担当し、倫理的ジレンマ、ケア・スピリット等について実習体験の振り返りを基に展開し成果を得た。

3. 小児看護学領域における研究に関する内容と評価

濱中教授は本学のプロジェクト研究「看護学生のケア・スピリットの認識に対する研究」（石井真紀子筆頭）の共同研究者として成果を学会発表や学会誌投稿を行った。また清水教授の科研の分担研究者として、継続して本学の倫理教育について検討を重ねた。

下野准教授は科学研究費の助成を受け、「早産児の両親を支援するフォローアップ外来における看護援助開発に向けた基礎的研究（課題番号：21K17389）」（研究代表者）に取り組んでいる。2021 年度は、国内外の文献検討を行い、その結果を基に、2022 年度に予定している質問紙調査の研究計画書を作成、研究倫理審査委員会に審査を申請した。文献検討の結果は、日本小児看護学会第 32 回学術集会での発表を目指し、演題登録した。また、小児看護学領域で取り組んでいる「小児科外来に関する研究」は、前年度取り組んだ文献検討を、濱中教授、遠藤助手とともに日本小児看護学会第 31 回学術集会において示説発表した。2021 年度は、小児科外来に勤務する看護師を対象としたインタビュー調査を計画していたが、新型コロナウイルス感染症の収束が見込めないため、中断している。

以上

2021 年度 精神看護学領域活動報告

1. 領域構成

岡田実（教授）、長南幸恵（准教授）、佐藤つかさ（助手）

2. 精神看護学領域における教育に関する内容と評価

今年度、精神看護学領域の講義は当初の予定通り終了し、新カリに向けてシラバスの整備も終了した。領域別実習では総合実習が当初の予定通り実施できたが、専門領域別実習では、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い実習クールの一部が学内実習を余儀なくされたが、他は概ねフルスペックの領域別実習を修了することができた。

学内実習に振替となった学生には学修上の不利益とならないように、事例を提供し、その事例に沿った看護計画のプレゼンテーションによる質疑応答を通して、看護計画策定の根拠を深める演習を行った。また、精神科病院で実習できたグループの看護計画策定の作業と一緒に参加してもらい、質疑応答によって実際の事例を通して看護計画策定の根拠を学ぶ機会を準備した。新型コロナ感染拡大に伴う領域別実習の制限は、このような工夫によって学生の不利益を最小限にすることができたと考えている。

また、毎年、看護計画策定用紙の書式を学生の自然な認知過程に沿ったものになるよう修正を施してきたが、新年度を見越して書式の改訂を行い、一覧性に特化した書式（一目で看護問題の抽出とその根拠を呈示できるような書式）に改めて、学生の認知過程に沿った学修過程に寄与できるように工夫を凝らした。また、新年度に向けて実習施設と実習期間の一部見直しを行った。

3. 精神看護学領域における研究に関する内容と評価

精神看護学領域では、研究室構成員それぞれの専門性の確立を目指している。

現在、分野としては 2020 年の学内共同研究に採択された『岩手県沿岸部にある医療機関と看護系大学の新たな連携の構築—ICT を活用した看護支援プログラムのニーズ調査』（以下、「ニーズ調査」と略）結果に基づいて、2021 年度は『岩手県沿岸部にある医療機関の看護部に対する ICT による地域貢献—継続した看護研究の支援プログラム提供の可能性について』（以下「ICT による地域貢献」と略）が学内共同研究に採択され、先の「ニーズ調査」において看護研究支援プログラムに参加意向を示した X 医療施設を対象に、プログラムの提供を提供し ICT による実現可能性を評価・検証した。

「ICT による地域貢献」の結果は、先の 2021 年度岩手保健医療大学学内研究報告会において発表し、看護研究 4 課題を 2 グループに分けて、年間 22 回の Zoom によるセッションによって得られた成果を報告した。当初計画していた ICT による看護研究支援の可能性は、対象施設職員の看護実践に確実に寄与できる看護研究に繋がったことと、またそれによる満足度を確認することができた。今後もいくつかの問題と課題を残してはいるが、これらを解決しながら、ICT を活用した地域貢献の活動を展開していく計画である。

ついでには、今回の看護研究支援プログラムに参加した医療機関には ICT による各種の支援を継続することとし、岩手県沿岸部の医療機関にこだわらず、岩手県内の医療機関を対象に看護研究支援プログラムやコンサルテーションなどの各種支援を提供する予定である。

補足) 佐藤助手が、2022年3月に修士(学術、放送大学大学院)を取得した(修論テーマ: COVID-19流行禍の過疎地域にある医療機関の看護師教育の課題)。長南准教授が、2022年から科研(基盤C)に採択された(研究テーマ: ASDのある成人の感覚特性と関連する生活のしにくさの実態に関する研究)。

以上

2021 年度 地域看護学領域活動報告

1. 領域構成

鈴木るり子（教授）、石田知世（助手）

2. 地域看護学領域における教育に関する内容と評価

1) 専門基礎科目及び統合科目における教育内容と評価

3 年前・後期に「ヘルスプロモーション論」「災害援助論」「地域看護学概論」「地域看護援助論」「保健医療福祉連携論」を開講し、4 年前期に「災害看護論」「保健医療福祉行政論」を開講した。学生の授業評価では「制度・法令の理解」に困難感がみられ、次年度は改善を図る事とした。その他、4 年生 7 名の「卒業研究計画書」を完成させた。

2) 公衆衛生看護学領域科目における教育内容と評価

「公衆衛生看護技術論」「公衆衛生看護管理論」は、4 年前期に保健師課程学生 20 人に開講した。時間割がタイトであり、科目展開の順序性にも問題が生じた。このことは、学生の授業評価においても指摘されており、次年度は改善を図る事とした。

3) 「地域看護学実習」「公衆衛生看護学実習」「総合実習」における内容と評価

実習は 4 年前期に実施した。「地域看護学実習」は地域事例のアセスメントの過程を通して、健康課題の抽出を捉え、看護職が地域アセスメントを実施する必要性について学びを深めた。学生の評価は、平均 3.78/4 であった。保健師課程学生 20 名の「公衆衛生看護学実習」は実習地 2 か所から中止の申し出があり、急遽変更したが学生の満足度 3.89/4 と高かった。また、「総合実習」は、6 名が健康課題解決の政策提言を行うことを実習項目とし、積極的に取組、指導者から高い評価を得た。学生評価は概ね 4 であり、満足度は高かった。

3. 地域看護学領域における研究に関する内容と評価

本年度は、地域看護学領域として取り組んだ研究はなかった。

鈴木教授の研究内容は、2011 年 3 月 11 日に発災した東日本大震災被災者の支援を目的にした大規模コホート研究：the RIAS Study（厚生労働科学研究費）に分担研究者として 10 年間従事してきた。対象地区は、岩手県山田町、大槌町、陸前高田市の全住民を対象に健康診断および健康状態調査を実施し、報告書を作成した。健康診断および健康調査は 2020 年度で終了し、2021 年度は、論文投稿と学会発表をした。現在もデータ分析中であり、今後も投稿論文作成予定である。

評価として、地域看護学領域として取り組んだ研究はなかったことから、次年度は改善を図りたいと考えている。

以上

2021 年度 在宅看護学領域活動報告

1. 領域構成

大沼由香（教授）、加藤美幸（助教）、工藤美由紀（助手）

2. 在宅看護学領域における教育に関する内容と評価

2021 年度は、1 年次科目の「基礎ゼミナール」（大沼）、在宅看護学領域に関する科目としては、3 年次科目の「在宅看護学概論」（大沼）、「在宅看護援助論」（大沼・加藤）を担当した。また、4 年次学生対象としては「在宅看護技術論」（大沼・加藤）、「在宅看護学実習」（大沼・加藤・工藤）を担当した。さらに、「総合実習（在宅看護学領域）（学生 4 名）」（大沼・加藤・工藤）、「卒業研究ゼミナール（学生 4 名）」（大沼・加藤）を開講した。

教育に関する学生からの授業評価は「在宅看護にとっても興味がわいた」、「在宅看護の看護展開の仕方や大事なことがわかりやすく学べた。」、「実践に基づいた在宅看護についての知識が深まった。」等々好意的、肯定的であった。一方で、演習時の教員連携不足の指摘があり、演習準備を万全とする必要がある。

一方、1 年生のアドバイザーとして看護専門基礎科目の学修や学生生活を大沼教授と加藤助教が担当し、定期面談を行い学修と学生生活について相談を受けるとともに状況把握に努めた。また加藤助教は国試対策委員として、模擬試験の監督や成績入力、分析等を担当した。

4 月に大沼教授が着任し、在宅看護学領域としての授業や実習の方針を共有する時間が不足し、早急な体制構築は困難であったが、学生の不利益とならないように大沼教授、加藤助教、工藤助手が協力し実習準備を進めた。新型コロナウイルス流行下での臨地実習は、臨地に通う日数や時間短縮の工夫により、学生全員が臨地で実習することができた。新型コロナウイルスの流行継続に備え、感染対策を講じた授業の実施、臨地での充実した臨床教育ができるように一層の工夫が必要となると思われる。

3. 在宅看護学領域における研究に関する内容と評価

大沼教授は 2019 年度科研費助成事業に採択された研究を本年度も継続している。今年度は、新型コロナウイルスの影響によりデータ収集が思うように進まず、遂行計画の変更が必要となった。しかし前年度までに収集したデータを大沼教授、加藤助教、工藤助手で分析し、日本在宅ケア学会（Wwb 開催）、日本地域看護学会（Web 開催）で 3 本の学会発表を行った。さらに分析を進め、学会発表と論文投稿を準備中であり、さらなる研究の継続と進展を目指す。

また、学内で「在宅ケアチーム」（大沼教授・加藤助教・工藤助手・鈴木・石田・相澤）を結成し、岩手いきいき財団の助成金を獲得して「新型コロナウイルス感染予防と地域での暮らしを守る事業」を企画実施した。在宅ケア従事者を対象として、認知症高齢者や障害者の人権を尊重しながら新型コロナウイルスの感染を予防する意義と方法の研修会を開催した。研修会では講義とグループワークを取り入れ、新型コロナウイルスの流行によりオンラインに変更して開催した。参加者は訪問看護師、老人ホーム施設長、介護支援専門

員、介護職員等であった。事業終了後、事業報告書を作成している。本事業の実施内容をまとめ、次年度は学会での発表を予定している。

さらに大沼教授は、新カリキュラムに対応するための「地域・在宅看護実習ハンドブック」(中央法規出版)を執筆した。看護学生や在宅看護学実習施設の指導者に活用いただける内容となっており、在宅看護学実習指導に役立てたい。

以上

2021年度 大学院科目一覧

【共通科目】

	科目名称	開講時期	単位数	担当教員	開講
必修	看護研究方法特論	1前	2	勝野とわ子	○
	臨床倫理特論	1後	2	清水哲郎・濱中喜代・石井真紀子	○
	多職種連携特論	1後	2	鈴木るり子・相澤出	○
	看護学教育特論	1後	2	江守陽子・濱中喜代・土田幸子・石井真紀子	○
選択	看護理論特論	1前	2	岡田実	○
	統計学特論	1後	2	大井慈郎	○
	質的研究方法論	1前	2	相澤出	○
	フィジカルアセスメント特論	1前	2	長谷川幹子・江守陽子	
	医療社会学特論	1後	2	相澤出	○
	コンサルテーション特論	1後	2	岡田実	○
	災害看護特論	1後	2	鈴木るり子	

【専門科目】

	科目名称	開講時期	単位数	担当教員	開講
基礎・地域連携看護学領域	基礎看護学特論Ⅰ	1前	2	長谷川幹子	
	基礎看護学特論Ⅱ	1後	2	長谷川幹子	
	基礎看護学演習Ⅰ	1前	2	長谷川幹子・石井真紀子	
	基礎看護学演習Ⅱ	1後	2	長谷川幹子	
	地域看護学特論Ⅰ	1前	2	鈴木るり子	
	地域看護学特論Ⅱ	1後	2	鈴木るり子	
	地域看護学演習Ⅰ	1前	2	鈴木るり子	
	地域看護学演習Ⅱ	1後	2	鈴木るり子	
臨床・応用看護学領域	老年看護学特論Ⅰ	1前	2	勝野とわ子	○
	老年看護学特論Ⅱ	1後	2	勝野とわ子	○
	老年看護学演習Ⅰ	1前	2	勝野とわ子・木内千晶	○
	老年看護学演習Ⅱ	1後	2	勝野とわ子・木内千晶	○
	母性看護学特論Ⅰ	1前	2	江守陽子	○
	母性看護学特論Ⅱ	1後	2	江守陽子	○
	母性看護学演習Ⅰ	1前	2	江守陽子・大谷良子・佐藤恵	○
	母性看護学演習Ⅱ	1後	2	江守陽子・大谷良子・佐藤恵	○
	小児看護学特論Ⅰ	1前	2	濱中喜代	○
	小児看護学特論Ⅱ	1後	2	濱中喜代	○
	小児看護学演習Ⅰ	1前	2	濱中喜代・下野純平	○
	小児看護学演習Ⅱ	1後	2	濱中喜代・下野純平	○
	精神看護学特論Ⅰ	1前	2	岡田実	
	精神看護学特論Ⅱ	1後	2	岡田実	
精神看護学演習Ⅰ	1前	2	岡田実・長南幸恵		
精神看護学演習Ⅱ	1後	2	岡田実・川添郁夫（非常勤）		
看護管理学領域	看護管理学特論Ⅰ	1前	2	伊藤収	○
	看護管理学特論Ⅱ	1前	2	伊藤収	○
	看護管理学特論Ⅲ	1前	2	伊藤収	○
	看護管理学演習	1後	2	伊藤収・土田幸子	○

2021年度 大学院 共通科目活動報告

1. 教員構成

清水哲郎（教授）、濱中喜代（教授）、勝野とわ子（教授）、江守陽子（教授）、岡田実（教授）、鈴木るり子（教授）、長谷川幹子（准教授）、土田幸子（准教授）、石井真紀子（講師）、相澤出（講師）、大井慈郎（講師）

2. 大学院共通科目における教育に関する内容と評価

【看護研究方法特論】勝野とわ子

本科目の到達目標は、1. 看護学における科学的な研究のプロセスを理解し説明できる、2. 量的および質的研究デザインの理解を深め説明できる、3. 量的研究と質的研究のクリテック基準を理解し実践できる、4. 質的研究のデータ収集方法と分析方法についてフィールドワークを実施し理解を深めることであった。履修生は、1～4について高いレベルで達成したと評価する。

【臨床倫理特論】清水哲郎、濱中喜代、石井真紀子

清水が科目責任者となり、濱中、石井と3名で担当した。履修生は5名であった。授業においては、臨床倫理の考え方、臨床倫理検討シートを使った検討の進め方、看護における倫理的な概念等についての教員による講義、および履修者による臨床で遭遇した事例のレポートとそれに基づく共同検討、およびモデル事例の共同検討を行った。

事例の共同検討は、臨床の振り返りとして有意義であった。授業内容の精選とより効果的な構成が今後の課題である。

【多職種連携特論】鈴木るり子、相澤出

「多職種連携特論」は、後期に開講し、鈴木と相澤が担当した。本講義では、多職種連携を理論的に考察する視点として、多職種連携に関する我が国の現状と課題について分析し、社会的な視点を取り入れ教授した。その内容は、専門職論、組織論に関する視点、専門職と実践共同体としてのチームおよびチームケアにおける保健医療福祉専門職種間の連携事例についてグループワークを行い理論的に考察した。履修生5人は単位を取得している。

【看護学教育特論】江守陽子、濱中喜代、土田幸子、石井真紀子

看護教育学の教育・研究を長年担当する教員4名によるオムニバス形式で講義した。生涯教育の観点から、成人学習に関する教育方法の基礎的理論をはじめ、看護職のための教育プログラムの作成、教材開発、教育評価の方法、留意点、看護基礎教育、継続教育の課題と将来構想等について学修し、看護学教育者としての資質を養うよう努めた。

授業方法としては講義だけでなく、グループワーク、院生によるプレゼンテーション、ディスカッション、相互評価の機会を多く設けた。

【看護理論特論】岡田実

選択科目：履修生3名。大理論に加え履修生が自身の修士論文テーマに関連があると判断した中範囲理論も射程に入れて学修した。Edmondsonの心理的安全性に関する著書『恐れのない組織』（英治出版）を指定文献に全員で抄読し意見交換することに加え、P. Bennerの各種文献から看護実践論や教育論について各自のプレゼンテーションとディスカッションを通じて、臨床現場のリアリティと修論テーマとの関連性を厳密にする作業を行った。

【統計学特論】大井慈郎

本授業は、統計学の研究手法について、データの収集方法から多変量解析の基礎までを幅広く扱った。全15回中、5回目以降は、実際に統計ソフトを用い、1人1人がデータセットを操作しながら、分析の意味や結果の読み方、論文執筆の際の表記方法を学習した。院生は、それまでの経歴から、数学や統計に関する知識に差があるが、少人数教育で強みを活かし、理解度を確認しつつ、授業を進行することができた。

【質的研究方法特論】相澤出

質的研究方法特論では、テキストの輪読を中心に、質的研究をめぐる方法論的基礎に関する解説を行った。その後、エスノグラフィー、参与観察法、生活史法、ライフストーリー法にしばらくながら、それらの方法の特徴を明らかにしつつ、ケアの現場での調査におけるメリット、デメリットなどについて解説した。

【フィジカルアセスメント特論】長谷川幹子、江守陽子

開講なし。

【医療社会学特論】相澤出

医療社会学特論では、受講者の関心、研究テーマに配慮しつつ、テキストの輪読を行った。そのなかで社会学における行為論や役割論、スティグマ論、ケア論、医療制度・政策などに関する諸論点について解説を行った。加えてテキストの輪読、報告を通じて、受講者がテキストを解釈し、まとめる力を養成できるよう努めた。

【コンサルテーション特論】岡田実

選択科目：履修生1名。外部コンサルテーションと内部コンサルテーションの役割と責任の対比を学修し、問題解決に困難を抱える医療現場に求められている専門的なスキルを考察しながら、医療機関に従事する専門看護師の具体的な活動を内部コンサルテーションの一例として学修した。悪化する状況に対処する際に必要な想像力・対処力・組織実行力・組織自己学習力が医療従事者個々に試されていることを共通認識した。

【災害看護特論】鈴木るり子

開講なし。

以上

2021年度 大学院 基礎・地域連携看護学領域活動報告

1. 領域構成

鈴木るり子（教授）、長谷川幹子（准教授）、石井真紀子（講師）

2. 大学院共通科目における教育に関する内容と評価

【基礎看護学特論Ⅰ】長谷川幹子

開講なし。

【基礎看護学特論Ⅱ】長谷川幹子

開講なし。

【基礎看護学演習Ⅰ】長谷川幹子、石井真紀子

開講なし。

【基礎看護学演習Ⅱ】長谷川幹子

開講なし。

【地域看護学特論Ⅰ】鈴木るり子

開講なし。

【地域看護学特論Ⅱ】鈴木るり子

開講なし。

【地域看護学演習Ⅰ】鈴木るり子

開講なし。

【地域看護学演習Ⅱ】鈴木るり子

開講なし。

以上

2021年度 大学院 臨床・応用看護学領域活動報告

1. 領域構成

濱中喜代（教授）、勝野とわ子（教授）、江守陽子（教授）、岡田実（教授）、木内千晶（准教授）、長南幸恵（講師）、下野純平（講師）、大谷良子（助教）、佐藤恵（助教）、川添郁夫（非常勤）

2. 大学院臨床・応用看護学領域における教育に関する内容と評価

【老年看護学特論Ⅰ】勝野とわ子

本科目は、高齢者ケアに応用可能な理論として、Parse 看護理論、ストレス・コーピング理論、スピリチュアリティ、セルフケア理論と看護実践について理解を深め、説明できる能力を養うこと、さらに、介護予防および慢性疾患を持つ高齢者の自己管理能力を支援する看護支援方法の探求、高齢者を全人的に査定する健康問題査定法の習得などを目標とした。それらについて、達成したと評価する。

【老年看護学特論Ⅱ】勝野とわ子

本科目は、認知症の種類、病態生理、症状の特徴、診断・治療方法を理解し説明できること、認知症者と家族介護者のアセスメントの指標を理解し実践できること、Dementia ケア理論（Person-centered Care 理論）について理解し説明できること、さらに、認知症者と家族介護者の健康課題や倫理的課題を理解し、社会資源や療養環境の調整を含めた解決策を考えることができることを目標とした。それらについて達成したと評価する。

【老年看護学演習Ⅰ】勝野とわ子、木内千晶

本科目は、院生が興味を持っている現象から文献検討を通して関心領域の研究課題を明らかにすること、さらに文献検討から、課題解決のための研究方法について知見を深め、研究計画書作成のための能力を養うことを目的とした。具体的には、文献検索の方法、文献クリティークの方法を修得し、適切な文献検討をする能力が得られたと評価する。

【老年看護学演習Ⅱ】勝野とわ子、木内千晶

本科目の到達目標は、1. 院生自身の研究テーマに基づいたパイロットスタディを実施できる、2. 収集したデータを分析することを通して修士論文で用いるデータ分析方法について理解し説明できる、3. 修士論文の研究計画書を作成できる、4. 研究倫理審査申請書について理解を深めるであった。1～4について達成したと評価する。

【母性看護学特論Ⅰ】江守陽子

母性看護学領域に関連ある看護課題および生殖年齢にある男女の心理的、身体的、社会的な健康課題について、国内外の文献や事例を参考に、幅広く講義した。また、現代社会に生きる女性と家族、思春期・青年期にある男女の健康課題、疾病の予防、ヘルス

ケアについて、それらを解決・評価する方法や理論を概観し、解説した。院生の興味・関心のある研究テーマについて、課題や研究手法を導き出せるような講義に努めた。

【母性看護学特論Ⅱ】江守陽子

院生の興味・関心のある研究テーマを絞り込むと同時に、生殖年齢にある男女の心理的、身体的健康課題や疾病の予防、健康の保持・増進のための看護職の活動について、保健医療政策に関連深い性と生殖の健康と権利、プレコンセプションケア、包括的性教育に焦点を当て、各々の理論や概念を整理し、理解を深めた。

一方、母性看護学領域の文献や事例を通して研究課題の設定、課題に則した研究デザイン、研究計画、分析方法について検討し、研究遂行能力を養うよう努めた。

【母性看護学演習Ⅰ】江守陽子、大谷良子、佐藤恵

母性看護学領域に関連ある看護課題および生殖年齢にある男女の心理的、身体的、社会的な健康課題について、国内外の文献を収集し、講読するとともに批判的な分析を加えた。また、文献を材料により高度な看護活動の方策について考察を深め、科学的思考を実践に生かすための研究仮説の立て方や研究方法、看護実践の質を評価する意義と方法等について講義した。それによって、母性看護学領域の看護実践研究の基礎的能力が養われることを目指した。

【母性看護学演習Ⅱ】江守陽子、大谷良子、佐藤恵

院生の興味・関心のある研究テーマに沿って、国内外の論文を読み進めた。また、性と生殖の健康と権利、プレコンセプションケア、包括的性教育に関連ある文献の研究結果および看護実践等の分析、批判的評価を通して、自らが取り組むべき研究テーマを確定し、研究する意義について整理することができた。

残り1年間で遂行可能な研究課題に則した研究対象、研究デザイン、具体的研究計画と手順を検討し、研究計画書の作成に着手した。

【小児看護学特論Ⅰ】濱中喜代

小児看護学の対象理解のために、エリクソンの自我発達理論、ピアジェの認知発達理論、コールバーグの道徳性発達理論、マラーの分離－個体化理論、オレムのセルフケア理論について、また乳児期～思春期までの心理的・身体的・社会的特徴の評価と看護について、関連文献の精読と討議を基に学修した。さらに小児と家族を取り巻く社会と関連付けて、健康課題、ヘルスプロモーション、疾病予防、権利擁護等について関連文献を読み込み意見交換した。ほぼシラバスどおりの学修ができ、確実な成果が得られた。

【小児看護学特論Ⅱ】濱中喜代

小児や家族を取り巻く社会環境・状況を踏まえ、子育て支援、虐待防止、災害看護について、また看護援助について、プレパレーション、症状緩和、エンドオブライフケアの視点から、さらにコミュニケーションスキルについて関連文献を精読し討議を基に学修を深めた。特別支援教育については重鎮のゲストスピーカーに講義を実施して頂き、

貴重な学びの機会となった。教育機能・相談機能および健康教育についても関連文献を読み込み意見交換した。ほぼシラバスどおりの学修ができ、確実な成果が得られた。

【小児看護学演習Ⅰ】濱中喜代、下野純平

新生児期～思春期までの援助理論と実践について、院生の発表を基に討議を行い、学修を深めた。また難病のこどもへの看護活動の方策について準備学修後に zoom でのシンポジウムに参加し、その内容について考察したことを発表・討議した。キャンプに参加予定であったがコロナ禍で実現できなかった。さらに最善の利益にかなう看護について、関連文献をクリティークし、自らの考えをレポートしまとめとした。一部変更があったものの、到達目標はおおむね達成できた。

【小児看護学演習Ⅱ】濱中喜代、下野純平

小児看護学に関する研究の動向と課題について講義で概観した。その後院生の研究課題に関する国内外の文献レビューを行った。次いで研究課題の明確化を図り、研究計画の試案を作成した後、数回かけて内容を吟味した。さらに研究倫理審査委員会への提出書類として院生が作成しものを吟味した。最後に委員会の回答を受けて、再度吟味修正し最終案を作成した。ともに内容を吟味する過程で自ら取り組むべき研究遂行能力が養われ、到達目標はおおむね達成できた。

【精神看護学特論Ⅰ】岡田実

開講なし。

【精神看護学特論Ⅱ】岡田実

開講なし。

【精神看護学演習Ⅰ】岡田実、長南幸恵

開講なし。

【精神看護学演習Ⅱ】岡田実、川添郁夫

開講なし。

以上

2021 年度 大学院 看護管理学領域活動報告

1. 領域構成

伊藤收（教授）、土田幸子（准教授）

2. 大学院看護管理学領域における教育に関する内容と評価

【看護管理学特論Ⅰ】伊藤收

履修生は3名であった。本科目は「認定看護管理者」の資格取得に資する看護協会で開催されている「認定看護管理者教育課程：ファーストレベル」に相当する科目である。よって、この科目は看護師長経験者向けの内容になっているが、履修生の内の2名が「主任職」は経験していたが、看護師長の経験を有していないことにより、課題レポート作成等には苦労があったと推察できる。

【看護管理学特論Ⅱ】伊藤收

履修生は2名であった。本科目は「認定看護管理者」の資格取得に資する看護協会で開催されている「認定看護管理者教育課程：セカンドレベル」に相当する科目である。上記の「特論Ⅰ」の学修をふまえて、看護部長職を支える次長職（副部長）が担う「人事管理・業務管理」と実習調整、院内教育等が主な学修内容である。

【看護管理学特論Ⅲ】伊藤收

履修生は2名であった。本科目は「認定看護管理者」の資格取得に資する看護協会で開催されている「認定看護管理者教育課程：サードレベル」に相当する科目である。上記の「特論Ⅰ・Ⅱ」の学修をふまえて、看護部長職（副院長職）に必要とされる「目標管理・人事考課・経営参画」などに加え、大学とのユニフィケーションについては、教員の経験をふまえ詳しく教授した。

【看護管理学演習】伊藤收、土田幸子

履修生は2名であった。本科目は「認定看護管理者」の資格取得に向け、必要となる各種の「レポート類」作成を中心に演習を行った、特に自施設の「組織分析」と、それを基にした「組織改善計画」の策定等に重点を置き、さらに「改善計画」に関連して、プレゼンテーションについても教授した。

【看護学特別研究に先立つ「研究指導」】伊藤收

履修生は2名であった。初年度であり、修士学位論文の「研究計画」の策定と、「研究倫理審査」の受審に向けての指導を行った。両名ともに、所属している（していた）岩手県医療局（県立病院）の看護に対する、強い愛着と改善意欲を持っており、それを背景とした研究関心が示された。本研究科も、岩手県に深く強く根ざし、岩手県に必要とされる「看護学修士課程」を目指すものであり、趣旨としては合致するのだが、具体的に修士の学位論文に落とし込むまでの過程では、多くの議論を要した。また、「関連するので」との理由で合同指導が希望された。同様の指導内容も多くあるため効率的である

反面、もうひとりから質問を受けると、教員が元の指導に戻るまでに時間を要したり、もうひとりの指導内容が取り込まれてしまい、それを修正するという場面もあった。この複数の院生を合同で指導することについては、長所と短所があり、一概に（良い悪いの）評価は付けられない。

3. 大学院看護管理学領域における研究に関する内容と評価

（学会発表）

看護師長の承認行為を取り巻く現象の構造 — 看護師長とスタッフナースの調査からの検討 —, 佐藤奈美枝, 伊藤 收, 第 41 回日本看護科学学会学術集会, 2021

この研究は、前任校で指導した博士後期課程の学生の「博士学位副論文」作成のために実施した研究の一部を昨年末の「第 41 回日本看護科学学会学術集会」で発表したものである。看護管理学では、部署管理者である看護師長が部下に対して行っている「承認行為」が、部署運営上重要と認識されていたが、それがどのような構造的性を持っているかについて、これまで余り研究させてこなかった。この研究では【承認行為を行う看護師長】と、その「承認行為を受けるスタッフナース」の双方に調査を実施し、その構造解明に挑んだものである。結果としては、看護師長側から、承認行為を身につけるための「教育プログラム」の必要性などが述べられ、博士後期課程の本論文に活かせる内容を多く獲得することができた。

以上

III 個人ごと業績

【学部】

■ 清水 哲郎（一般教養：教授）

【著書】

- 1) 清水哲郎・会田薫子・田代志門（編著）：『臨床倫理の考え方と実践：医療・ケアチームのための事例検討法』，共著，東京大学出版会，2022. 全 165+12ps. 清水哲郎 担当執筆部分：Ⅰ-2「臨床倫理事例検討の進め方」（pp. 13-28），Ⅱ-0「モデル事例を使った検討の実際例」（pp. 30-38），Ⅲ-3「臨床の倫理原則における《尊厳》の位置」（pp. 101-104），Ⅲ-4「厚生労働省「人生の最終段階ガイドライン」と《情報共有-合意モデル》」（pp. 105-109）
- 2) 清水哲郎：『医療・ケア従事者のための哲学・倫理学・死生学』単著，医学書院，2022. 全 280 頁.

【学会発表】

- 1) 清水哲郎：教育講演（招待）「高齢者の医療・ケアに関する臨床倫理 — 意思決定プロセスと本人・家族の支援」，第 63 回日本老年医学会学術集会，2021. 6. 11-13（オンライン開催）
- 2) 清水哲郎：特別発言（招待），シンポジウム「呼吸不全の在宅緩和医療と ACP の役割」，日本老年医学会，AMED 三浦班「呼吸不全に対する在宅緩和医療の指針に関する研究」，東京大学大学院人文社会系研究科 上廣死生学・応用倫理講座（共同主催），2022. 3. 6（オンライン開催）

【その他】

- 1) 清水哲郎：生命・人権・医療，民医連医療 586（2021. 7）：18-19
- 2) 清水哲郎：「臨床における生と死」への死生学的アプローチ，千里ライフサイエンス振興財団ニュース No. 95, p. 19, 2022. 2

■ 相澤 出（一般教養：准教授）

【論文】

- 1) 相澤出，2021，「地域医療の担い手が捉える過疎地域の家族と介護の変化：宮城県登米市を事例として」『社会学評論』71(4)：577-594.

【その他】

- 1) 相澤出，2021，「井口高志著『認知症社会の希望はいかにひらかれるのか：ケア実践と本人の声をめぐる社会学的探求』（晃洋書房，2020 年）」『保健医療社会学論集』32(1)：107-108.
- 2) 大沼由香，工藤美由紀，加藤美幸，鈴木るり子，石田知世，相澤出，2022，『地域在

宅における新型コロナ感染対策と尊厳を守るケア事業報告書』公益財団法人いきいき
岩手支援財団助成事業

■ 大井 慈郎（一般教養：講師）

【論文】

- 1) 大井慈郎：地域づくりと閉じこもり防止の隙間：岩手県盛岡市 X 地区における「つながりづくりをしない」高齢者支援を事例に，社会学年報 50，2021. 45-55

【学会発表】

- 1) 大井慈郎，木村雅史，松原久：地域づくりによる介護予防事業の地域受容過程研究：宮城県 X 市高齢者サロンを事例に，第 67 回東北社会学会大会，2021. 7. 18. オンライン
- 2) 大井慈郎：インドネシアにおける人口データ取り扱いの困難性：ジャカルタ首都圏 X 村データを事例に，第 68 回日本都市学会大会，2021. 10. 24. オンライン
- 3) 大井慈郎：「地域づくり」と「閉じこもり防止」の隙間の検討：岩手県 X 市 Y 地区における「つながりづくり」をしない高齢者支援を事例に，第 94 回日本社会学会大会，2021. 11. 13. オンライン

■ 長谷川 幹子（基礎看護学領域：教授）

【学会発表】

- 1) 長谷川幹子，安福真弓，浅井直子，作間弘美：看護大学生における学年間での死生観の変化，第 41 回日本看護科学学会学術集会，2021.

■ 作間 弘美（基礎看護学領域：講師）

【学会発表】

- 1) 長谷川幹子，安福真弓，浅井直子，作間弘美：看護大学生における学年間での死生観の変化，第 41 回日本看護科学学会学術集会，2021，Web 開催.

■ 土田 幸子（成人看護学領域：教授）

【論文】

- 1) 齋藤史枝，勝野とわ子，木内千晶，土田幸子，甲斐恭子：看護系大学におけるタブレット端末活用に向けた基礎的研究－A 大学学生のタブレット端末活用の実態－，日

本看護学教育学会誌, 31(3), 81-89, 2022.

- 2) 松村憲浩, 五十嵐岳, 瀧田郁洋, 菱沼智紀, 井上智友記, 土田幸子, 長田尚彦, 國島広之, 信岡祐彦: 敗血症が疑われる高齢救急患者の予後予測因子についての検討, 日本臨床検査医学会誌, 69(9), 658-664, 2021.

■ 石井 真紀子 (成人看護学領域: 准教授)

【論文】

- 1) 佐藤恵, 成田真理子, 石井真紀子, 添田咲美, 菊池和子, 濱中喜代: 「ケア・スピリット」に関する看護学生の経年的変化—A 大学看護学生に対する調査から—, 岩手看護学会誌, 15(1・2), 58-69, 2021.

【学会発表】

- 1) 佐藤恵, 成田真理子, 石井真紀子, 添田咲美, 菊池和子, 濱中喜代: 「ケア・スピリット」に関する看護学生の経年的変化—A 大学看護学生に対する調査から—, 第14回岩手看護学会(ハイブリット開催), 2021.

■ 添田 咲美 (成人看護学領域: 助手)

【論文】

- 1) 佐藤恵, 成田真理子, 石井真紀子, 添田咲美, 菊池和子, 濱中喜代: 「ケア・スピリット」に関する看護学生の経年的変化—A 大学看護学生に対する調査から—, 岩手看護学会誌, 2021

【学会発表】

- 1) Sakumi Soeda: Discontinued consultation in Type2 Diabetes patients in Japan —A literature review, EAFONS conference, 2021
- 2) 佐藤恵, 成田真理子, 石井真紀子, 添田咲美, 菊池和子, 濱中喜代: 「ケア・スピリット」に関する看護学生の経年的変化—A 大学看護学生に対する調査から—, 岩手看護学会, 2021

■ 佐藤 大介 (成人看護学領域: 助手)

【論文】

- 1) 佐藤大介, 松田浩一, “手術室器械出し看護師の良い渡し方の分析に関する一考察”, 人工知能学会, 身体知研究会第36回研究会論文集, No. 2, <http://www.sigskl.org/activity/papers/sig-sk1-20220212-2.pdf>, 2022.

【学会発表】

- 1) 手術室器械出し看護師の良い渡し方の分析に関する一考察, 佐藤大介, 松田浩一, 第36回身体知研究会(web開催), 2022

【その他】

- 1) 手術看護のイマを知ろう! スルスル読み解き海外文献 vol.9, 佐藤大介, 古島幸江(監修), OPE NURSING, メディカ出版, 第36巻9号, p77-79, 2021

■ 勝野 とわ子 (老年看護学: 教授)

【著書】

- 1) 勝野とわ子: 看護過程. 志自岐康子, 松尾ミヨ子, 習田明裕編, 基礎看護学①看護学概論 (p197-204), メディカ出版, 2022.
- 2) 勝野とわ子: 災害看護の基礎. 志自岐康子, 松尾ミヨ子, 習田明裕編, 基礎看護学①看護学概論 (p296-305), メディカ出版, 2022.
- 3) 勝野とわ子: 看護と人間尊重. 松尾ミヨ子, 城生弘美, 他編, 基礎看護学② 基礎看護技術 I (p44-50), メディカ出版, 2022.
- 4) 勝野とわ子: 高齢者のヘルスアセスメント. 松尾ミヨ子, 城生弘美, 他編, 基礎看護学② 基礎看護技術 I (p365-374), メディカ出版, 2022.

【論文】

- 1) 齋藤史枝, 木内千晶, 勝野とわ子, 土田幸子, 甲斐恭子: 看護系大学におけるタブレット端末活用に向けた基礎的研究—A 大学学生のタブレット端末活用の実態—. 日本看護学教育学会誌, 31(3), p81-89, 2022.

【学会発表】

- 1) 青山美紀子, 勝野とわ子, 出貝裕子, 森田牧子: 若年認知症配偶者が抱く社会的孤立感からネガティブ感情を消失させた要因が及ぼす効果. 日本認知症ケア学会誌, 20(1), p155, 2021.

■ 木内 千晶 (老人看護学領域: 教授)

【論文】

- 1) 齋藤史枝, 木内千晶, 勝野とわ子, 土田幸子, 甲斐恭子: 看護系大学におけるタブレット端末活用に向けた基礎的研究—A 大学学生のタブレット端末活用の実態—. 日本看護学教育学会誌, 31(3), p81-89, 2022.

【学会発表】

- 1) 松尾まき, 高山裕子, 木内千晶: 常勤看護職におけるバーンアウトから離職意向まで SOC とワーク・ライフ・バランス調節力を踏まえた構造方程式モデリングアプローチ, 第 25 回日本看護管理学会学術集会, 2021 年 8 月, 横浜
- 2) Yuko TAKAYAMA, Chiaki KINOUCHI, Maki MATSUO, Atsuko KOBAYAMA: A gender-related comparison of burnout causal model among Japanese hospital nurses, ICN Congress 2021, 2021 年 11 月, オンライン

■ 齋藤 史枝 (老年看護学領域: 助教)

【論文】

- 1) 齋藤史枝, 木内千晶, 勝野とわ子, 土田幸子, 甲斐恭子: 看護系大学におけるタブレット端末活用に向けた基礎的研究—A 大学学生のタブレット端末活用の実態—. 日本看護学教育学会誌, 31(3), p81-89, 2022.

■ 江守 陽子 (母性看護学領域: 教授)

【論文】

- 1) 大谷良子, 佐藤恵, 江守陽子: 不妊治療後出産した女性の出産体験, 日本生殖看護学会誌 18 (1): 11-19, 2021

【学会発表】

- 1) Yoko Emori, Atsuko Kawano: Relationships between the socioeconomic status (SES) of females who raise their children and their health-related QOL/child-raising stress. The 32nd ICM Triennial Congress in Bali, Indonesia. June, Web, 2021. Location: Virtual via Zoom Webinar

■ 大谷 良子 (母性看護学領域: 准教授)

【論文】

- 1) 大谷良子, 佐藤恵, 江守陽子: 不妊治療後出産した女性の出産体験, 日本生殖看護学会誌, 第 18 巻第 1 号, 2021.

■ 佐藤 恵（母性看護学領域：助教）

【論文】

- 1) 佐藤恵, 成田真理子, 石井真紀子, 添田咲美, 菊池和子, 濱中喜代 (2021). 「ケア・スピリット」に関する看護学生の経年的変化—A 大学看護学生に対する調査から—, 岩手看護学会誌, 第 15 巻第 2 号, p58-69
- 2) 大谷良子, 佐藤恵, 江守陽子 (2021). 不妊治療後出産した女性の出産体験, 日本生殖看護学会誌, 第 18 巻第 1 号, p11-19

【学会発表】

- 1) 佐藤恵, 成田真理子, 石井真紀子, 添田咲美, 菊池和子, 濱中喜代 (2021). 「ケア・スピリット」に関する看護学生の経年的変化—A 大学看護学生に対する調査から—, 第 14 回岩手看護学会学術集会 (Web 開催)

■ 濱中 喜代（小児看護学領域：教授）

【論文】

- 1) 佐藤恵, 成田真理子, 石井真紀子, 添田咲美, 菊池和子, 濱中喜代 「ケア・スピリット」に関する看護学生の経年的変化—A 大学看護学生に対する調査から— 岩手看護学会誌 15 (1) 58-69 2021.

【学会発表】

- 1) 下野純平, 遠藤麻子, 濱中喜代, 遠藤芳子 小児科外来を受診した保護者の思いに関する国内文献検討 日本小児看護学会第 31 回学術集会 2021 年 6 月 WEB 開催 講演集 p123
- 2) 佐藤恵, 成田真理子, 石井真紀子, 添田咲美, 菊池和子, 濱中喜代 「ケア・スピリット」に関する看護学生の経年的変化—A 大学看護学生に対する調査から— 第 14 回岩手看護学会学術集会 (Web 開催), 2021 年 10 月

■ 下野 純平（小児看護学領域：准教授）

【学会発表】

- 1) 下野純平, 遠藤麻子, 濱中喜代, 遠藤芳子: 小児科外来を受診した子どもの保護者の思いに関する国内文献検討, 日本小児看護学会第 31 回学術集会, 2021 年 6 月～7 月, Web 開催.

【その他】

- 1) 濱中喜代, 下野純平: 2022 年度版医学書院看護師国家試験問題集, 『系統看護学講

座』編集室編集，医学書院，2021．小児看護学一般問題・状況設定問題の解答・解説

■ 遠藤 麻子（小児看護学領域：助手）

【学会発表】

- 1) 下野純平，遠藤麻子，濱中喜代，遠藤芳子：小児科外来を受診した子どもの保護者の思いに関する国内文献検討，日本小児看護学会第31回学術集会，2021年6月～7月，Web開催．

■ 岡田 実（精神看護学領域：教授）

【著書】

- 1) 阿保順子，岡田実，東修，那須典政共著：統合失調症急性期看護学一患者理解の方法と理論にもとづく実践，すびか書房，2021
- 2) 岡田実：ナイチンゲールの女性論ーラスキン，J.S. ミル，ガマーニコフとの比較から（所収：河村貞枝，出島有紀子，岡田実他：ナイチンゲールの越境3・ジェンダー，ナイチンゲールはフェミニストだったのか，31-76頁，日本看護協会出版会，2021

■ 長南 幸恵（精神看護学領域：准教授）

【学会発表】

- 1) 小川七世，岡田俊，橋本竜作，長南幸恵，鈴木匡子：能動的触覚による形態認知の障害を呈した成人自閉スペクトラム症の1例，第47回日本コミュニケーション障害学会学術講演会，2021年7月30日，新潟（朱鷺メッセ新潟コンベンションセンター）．

【その他】

- 1) 長南幸恵，小川七世，菅野重範，鈴木匡子：自閉症スペクトラム症における触質感知覚および触覚性形態認知の検討，文部科学省研究費補助金新学術変革領域研究(A)「実世界の奥深い質感情報の分析と生成」B01項目「質感生体認識」第3回深奥質感領域班会議，2022年3月24日，オンライン開催．

■ 佐藤 つかさ（精神看護学領域：助手）

【論文】

- 1) 佐藤つかさ：COVID-19流行禍の過疎地域にある医療機関の看護師教育の課題～看護

部長の視点から～，放送大学大学院修士課程学位論文，2021

■ 鈴木 るり子（地域看護学領域：教授）

【論文】

- 1) Megumi Tsubota-Utsugi, Yuki Yonekura, Ruriko Suzuki, et al. (2021) : Psychological Distress in Responders and Nonresponders in a 5-year Follow-up Health Survey: The RIAS Study. Journal of Epidemiology 2021.

【学会発表】

- 1) 坪田（宇津木）恵，佐々木亮平，鈴木るり子（2021）：東日本大震災被災者高齢者における不眠に対する感覚機能障害の累計的影響，第80回日本公衆衛生学会，2021，東京.
- 2) 鈴木るり子，佐々木亮平（2022）：災害公営住宅入居者における「住まい」が「住まい方」に及ぼす影響：The RIAS Study，第10回日本公衆衛生看護学会，2022，大阪.
- 3) 鈴木るり子，松川久美子，石川美弥子（2022.3）：久慈地域における地域エンパワーメントによるALS患者の医療的ケア体制の構築，第33回岩手公衆衛生学会，2022.3，矢巾町.

【その他】

- 1) 大沼由香，工藤美由紀，加藤美幸，鈴木るり子，石田知世，相澤出：地域在宅における新型コロナ感染対策と尊厳を守るケア事業報告書，公益財団法人いきいき岩手支援財団助成事業，2022.1月

■ 石田 知世（地域看護学領域：助手）

【その他】

- 1) 大沼由香，工藤美由紀，加藤美幸，鈴木るり子，石田知世，相澤出：地域在宅における新型コロナ感染対策と尊厳を守るケア事業報告書，公益財団法人いきいき岩手支援財団助成事業，2022.1月

■ 大沼 由香（在宅看護学領域：教授）

【著書】

- 1) 尾崎章子編著：「地域・在宅看護実習ハンドブック」，共著，中央法規出版，2021. 全177ps，大沼由香担当執筆部分：第1部第4章3.5, 第2部7.15.27

【論文】

- 1) 大沼由香, 星純子, 鹿野卓子: 新型コロナウイルスパンデミック期における在宅看護実習による学生の学び, 日本伝統医療看護連携学会誌, 2 (2), 65-73, 2021.
- 2) 鹿野卓子, 大沼由香: 短期大学看護学生の地域共生型サービスでの学び—フィールドワークを通して—, 日本伝統医療看護連携学会誌, 2 (2), 94-100, 2021.
- 3) 山崎忍, 大沼由香: 事例検討会の運営方法の提案—介護支援専門員による家族への支援事例を通して—, 日本伝統医療看護連携学会誌, 2 (2), 85-93, 2021.
- 4) 佐竹正延, 石母田由美子, 立石和子, 井上由紀子, 大沼由香, 佐藤喜根子他: 新型コロナウイルス感染症流行時における仙台赤門短期大学の対応, 日本伝統医療看護連携学会誌, 2 (2), 20-24, 2021.

【学会発表】

- 1) 大沼由香: COVID-19 パンデミックにおけるオンライン事例検討の可能性, 日本看護学教育学会第31回学術集会, 2021. 8~9月 (WEB開催)
- 2) 大沼由香, 加藤美幸, 工藤美由紀, 鈴木慈子, 工藤うみ, 芳賀博: 宮城県A市における地域包括支援センターの自主活動グループの立ち上げ支援の特徴と課題, 第26回日本在宅ケア学会学術集会, 2021. 8月 (ハイブリット開催)
- 3) 大沼由香, 工藤美由紀: 青森県B市の地域包括支援センターが行う自主活動グループ支援における課題, 日本地域看護学会第24回学術集会, 2021. 9月 (WEB開催)
- 4) 立石和子, 大沼由香, 佐藤浩一郎, 佐藤喜根子: コロナ禍における看護短大生の学修への影響—Webアンケート調査結果より—, 日本看護学教育学会第31回学術集会, 2021. 8~9月 (WEB開催)
- 5) 工藤美由紀, 大沼由香, 加藤美幸, 富永壮, 立石和子, 芳賀博: 北海道千歳市の介護予防センターと地域包括支援センターの連携による自主活動グループの立ち上げ支援の特徴と課題, 第26回日本在宅ケア学会学術集会, 2021. 8月 (ハイブリット開催)
- 6) 工藤うみ, 大沼由香: 介護施設における看取りに対する介護職員の態度構造とその変化, 第26回日本在宅ケア学会学術集会, 2021. 8月 (ハイブリット開催)
- 7) 立石和子, 大沼由香, 浦山さか, 横手裕: 看護系大学における「倫理」教育の現状, 第3回日本伝統医療看護連携学会学術大会, 2021. 11~12月 (ハイブリット開催)
- 8) 松坂美希子, 大沼由香: 多職種によるリフレクションを用いた事例検討会運営の効果と課題, 第45回日本死の臨床研究会年次大会, 2021. 12月 (WEB開催)

【その他】

- 1) 大沼由香, 及川奈保美, 開沼美由紀, 立石和子: 多職種連携事例検討会の提案~わかる事例検討会~, 日本看護学教育学会第31回学術集会, 2021, 8月交流集会 (WEB開催)
- 2) 大沼由香, 工藤美由紀, 加藤美幸, 鈴木るり子, 石田知世, 相澤出: 地域在宅における新型コロナ感染対策と尊厳を守るケア事業報告書, 公益財団法人いきいき岩手支

援財団助成事業，2022. 1 月

■ 加藤 美幸（在宅看護学領域：助教）

【学会発表】

- 1) 大沼由香，加藤美幸，工藤美由紀，鈴木慈子，工藤うみ，芳賀博：宮城県 A 市における地域包括支援センターの自主活動グループの立ち上げ支援の特徴と課題，第 26 回日本在宅ケア学会学術集会，2021. 8 月（ハイブリット開催）
- 2) 工藤美由紀，大沼由香，加藤美幸，富永壮，立石和子，芳賀博：北海道千歳市の介護予防センターと地域包括支援センターの連携による自主活動グループの立ち上げ支援の特徴と課題，第 26 回日本在宅ケア学会学術集会，2021. 8 月（ハイブリット開催）

【その他】

- 1) 大沼由香，工藤美由紀，加藤美幸，鈴木るり子，石田知世，相澤出：地域在宅における新型コロナ感染対策と尊厳を守るケア事業報告書，公益財団法人いきいき岩手支援財団助成事業，2022. 1 月
- 2) 2021 年 第 20 回認定看護師認定更新審査（皮膚・排泄ケア認定看護師）合格、資格更新する。

■ 工藤 美由紀（在宅看護学領域：助手）

【学会発表】

- 1) 工藤美由紀，大沼由香，加藤美幸，富永壮，立石和子，芳賀博：北海道千歳市の介護予防センターと地域包括支援センターの連携による自主活動グループの立ち上げ支援の特徴と課題，第 26 回日本在宅ケア学会学術集会，2021. 8 月（ハイブリット開催）
- 2) 大沼由香，工藤美由紀：青森県 B 市の地域包括支援センターが行う自主活動グループ支援における課題，日本地域看護学会第 24 回学術集会，2021. 9 月（WEB 開催）

【その他】

- 1) 大沼由香，工藤美由紀，加藤美幸，鈴木るり子，石田知世，相澤出：地域在宅における新型コロナ感染対策と尊厳を守るケア事業報告書，公益財団法人いきいき岩手支援財団助成事業，2022. 1 月

以上

【大学院】

■ 伊藤 收（看護管理学領域：教授）

【学会発表】

- 1) 佐藤奈美枝, 伊藤收：看護師長の承認行為を取り巻く現象の構造 — 看護師長とスタッフナースの調査からの検討 —, 第41回日本看護科学学会学術集会, 2021

以上

IV 外部資金獲得状況

外部資金獲得状況一覧

・看護学部看護学科

清水哲郎 (一般教養：教授)

1) 基盤研究(A)(代表)

課題番号：18H03572

研究課題名：臨床倫理システムの哲学的展開と超高齢社会への貢献および医療者養成課程への組み込み

濱中喜代 (小児看護学：教授)

1) 基盤研究(A)(分担)

課題番号：18H03572

研究課題名：臨床倫理システムの哲学的展開と超高齢社会への貢献および医療者養成課程への組み込み

勝野とわ子 (老年看護学：教授)

1) 基盤研究(C)(代表)

課題番号：20K10918

研究課題名：若年認知症家族介護者の経験している「慢性的悲嘆」と健康に関する研究

2) 基盤研究(C)(分担)

課題番号：19K10991

研究課題名：若年認知症家族介護者の健康問題の「見える化」による支援システムの構築

木内千晶 (老年看護学：教授)

1) 若手研究(代表)

課題番号：21K17426

研究課題名：高齢者看護に携わる看護補助者のワーク・エンゲイジメント・プロセスモデルの検証

大沼由香 (在宅看護学：教授)

1) 若手研究(代表)

課題番号：19K19725

研究課題名：地域包括支援センターが行う住民主体の介護予防活動の創出支援システムの開発

2) 基盤研究(C)(分担)

課題番号：19K11108

研究課題名：生活保護現業員と保健師の協働による自己効力感向上を目指したケース会議の検証

3) 基盤研究(A)(分担)

課題番号：19H00515

研究課題名：アジアの伝統医学における医療・医学の倫理と行動規範、及びその思想的な研究

長南幸恵 (精神看護学：准教授)

1) 基盤研究(C)(代表)

課題番号：16K12158

研究課題名：ASD 児の各感覚の特性と生活の困難さに関する研究

相澤出 (一般教養：准教授)

1) 基盤研究(A)(分担)

課題番号：18H03572

研究課題名：臨床倫理システムの哲学的展開と超高齢社会への貢献および医療者養成課程への組み込み

2) 基盤研究(C)(分担)

課題番号：21K02245

研究課題名：地方女子ミッション教育の比較歴史社会学的研究

下野純平 (小児看護学：准教授)

1) 若手研究(代表)

課題番号：21K17389

研究課題名：早産児の両親を支援するフォローアップ外来における看護援助開発に向けた基礎的研究

大谷良子 (母性看護学：准教授)

1) 若手研究(代表)

課題番号：19K19685

研究課題名：体外受精により妊娠した女性の妊娠・出産体験のとらえ方に関する研究

大井慈郎 (一般教養：講師)

1) 若手研究(代表)

課題番号：17K13838

研究課題名：東南アジア都市における工業団地労働者の地域・階層移動研究

佐藤恵 (母性看護学：助教)

1) 若手研究(代表)

課題番号：19K19650

研究課題名：分娩様式を問わない出産体験評価尺度の実用化にむけた検討

石田知世 (地域看護学：助手)

1) 基盤研究(C)(分担)

課題番号：19K11200

課題研究名：渡航看護のコンピテンシー・モデルの開発と渡航看護認識向上プログラムの検討

以上

・看護学研究科 看護学専攻

伊藤 收 (看護管理学：教授)

1) 基盤研究(C)(分担)

課題番号：17K12122

課題研究名：学習者中心パラダイムに基づく看護人材育成のための自己点検支援ポータル開発

以上

V 社会贡献(学外活動)実績

社会貢献(学外活動)実績

項目	件数
他大学講師	11 件
他施設での講師 (専門学校、病院 等)	22 件
その他講師 (放送大学、講習会、セミナー、 公開講座 等)	29 件
学会活動・学会役員 (理事、監事、評議員、各種委員会 メンバー 等)	39 件
行政機関・企業・NPO等参加 (公益財団法人委員、看護協会委員、 内閣府分科会委員 等)	23 件
総説・解説記事 (新聞連載、雑誌掲載 等)	4 件
その他社会貢献活動 (地域交流 等)	16 件

令和3年度在籍教員数

教授	准教授	講師	助教	助手	計
11	5	2	6	9	33

自己点検・評価報告書 2021年度版

2022年5月26日 発行

発行者 岩手保健医療大学
自己点検評価委員会

住 所 〒020-0045
岩手県盛岡市盛岡駅西通一丁目6番30号

電 話 019-606-7030 (代表)

